

# アイヌ自製品の研究—矢尻—

宇田川 洋

## はじめに

以前に、「北方地域の煙管と喫煙儀礼」という小論の前書きとして、以下のように述べたことがある。「筆者が提唱する北海道を中心とする北方地域の“アイヌ考古学”を考えるためには、種々のアプローチのしかたがある。その一つとして物質文化史学的方法があるが、それを実践するために、以前に、考古学上のアイヌ文化に属する軽石製火皿 kamuy-ape-o-p について考察を加えたことがある（宇田川 1979）。今回は それと密接な関係にある煙管……の北方地域における考古学上あるいは民族学上の資料を検討する。……」（宇田川 1991: 51）

以上に取り上げた軽石製火皿・煙管というような資料は、ともに筆者がいう「アイヌの自製品」（宇田川 1989 a）に相当するものである。それらの研究は、「自製品」に対する「和産物」もしくはより北方地域の製品との考古学的・民族学的比較研究を行う素材となっているわけであるが、そのエスノアーケオロジカルな研究によって、アイヌ文化の位置づけがより明瞭になってくるものと考えている。ちなみに、かつて発表した銚頭や弦楽器の頭部状の骨角器などの研究もこの線上にあるものである（宇田川 1987・1989 b）。

今回、ここで扱う「矢尻」は、アイヌの狩猟具の一つとして一般的なものであるが、その形態において、他の地域ではあまり見られない特徴をもち、しかもそれが北海道アイヌの場合では普遍的な種類である一つのタイプが存在する。また、矢尻は考古学的にも石鏃・骨鏃・鉄鏃などとして遺存し得る遺物でもあるので、その資料の検討を行ってみることにする。なお、引用文中などの〔 〕内は筆者の註である。

## 1 矢尻とは

### 1-1 『蝦夷志』に見られる矢尻

新井白石は、「蝦夷」のいわゆる土俗品の観察を詳細に行い、『蝦夷志』にそれをまとめている（享保5年・1729）。「武器」の項において、矢の部分については「矢長尺有二寸、鹿骨為鏃、沓以竹、鏃有逆鬚者」と記載している。つまり、矢の長さは1尺2寸で、矢柄は鹿の骨製、矢尻は竹製で逆鉤（アゲ）を有しているという内容である。図1はその付図であるが、矢尻部には「如是竹ニテ添根 是ニ毒ヲ附ル」と説明がある。児玉作左衛門は、この『蝦夷志』を解説しているが、次の

ように説明を加えている。「矢の根即ち鏃は二部よりなる。矢柄に接する部〔中柄〕は約二寸六分の鹿の足骨で作られ、一端は矢柄に入り、他端は逆鬚（註、逆鉤）のある竹製の鏃がはまっている。これは長さ一寸、幅五分の三角形のもので、これに毒を塗るのである。この竹製と鹿骨鏃〔中柄〕および矢柄の接するところは糸巻きでとめられている」という（児玉 1971 : 591）。さらに、図1の説明書きにもあるように「矢毒は附子〔トリカブト〕、蜘蛛、トウガラシの三種のものよりなるが、これらの料匁は不明である。この毒が人についたときはニンニクをすり込めば直ちに消えるといわれている」と続けている。

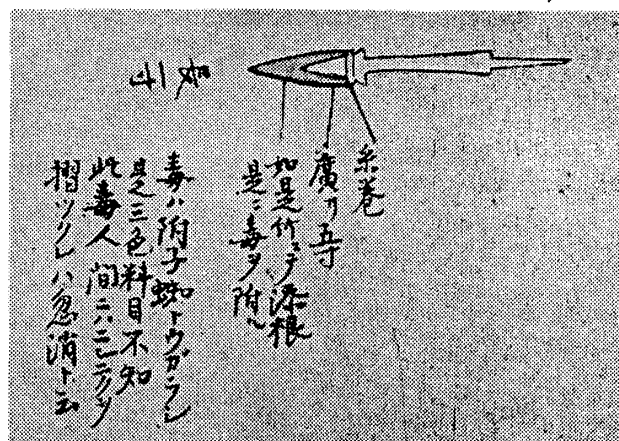


図1 『蝦夷志』に見られる矢尻

### 1-2 アイヌの矢尻の一般的理解

今、古記録に見られる一例を紹介したが、一般的にアイヌの基本的な矢 (ay) は、おおむね上記のような形態をとっているようである。図2に弓矢の実測図を引用しておいたが、犬飼哲夫・名取武光によると以下のようにいわれている。

「チアニアイとクアレアイの二種類がある。前者は手持矢、即ち普通の弓に用ゆるもので、矢羽が附いてゐる。後者は仕掛弓に用ゆる矢で矢羽が無い。矢の長さは九五糎から五〇糎位迄である。弓の長さに比例して、樺太の矢は長く、本道のもののは短い。鉄鏃或は竹鏃を用ひ、竹鏃の場合は骨或は木の矢柄を附ける。北海道の矢は多く竹材である。樺太のものには、木質で鉄鏃を焼いて挿し込んだものが多い。……鏃には所謂箭毒（シュルク）を塗る」（犬飼・名取

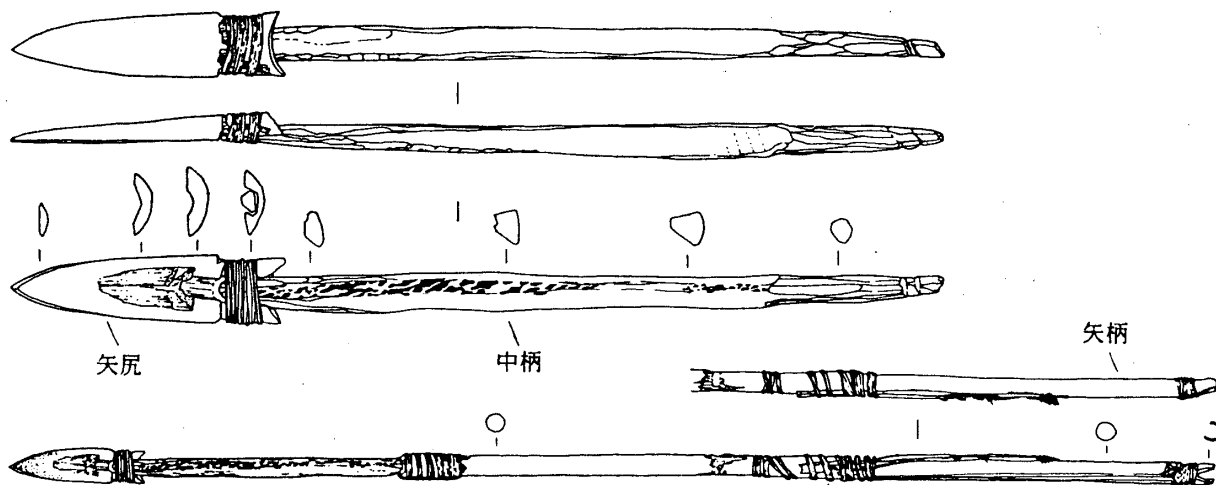


図2 弓矢の実測図（下が全体図，上は矢尻・中柄の拡大図）

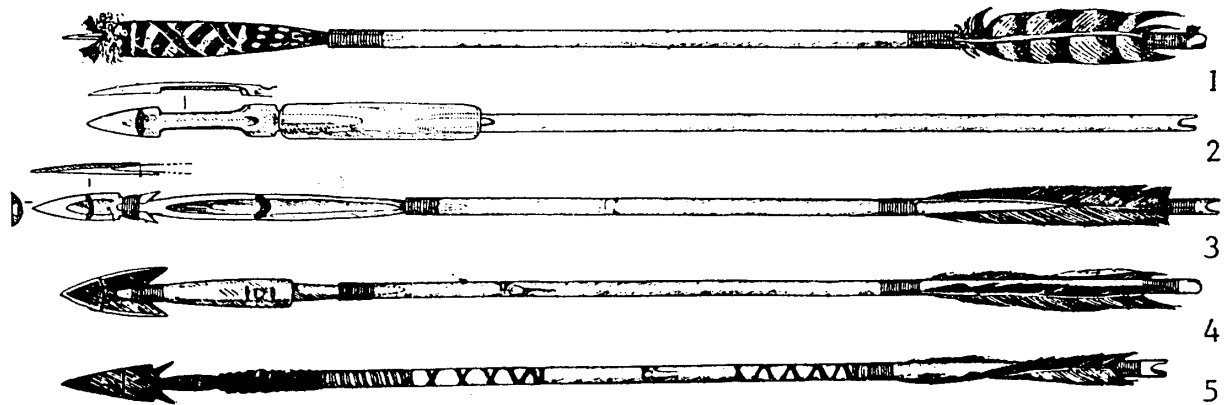


図3 弓 矢 の 種 類

1934 : 33)

次に、弓矢のいくつかの種類について簡単に紹介しておく。図3は、金田一京助・杉山壽榮男(1942)が示したものである。

1は、クマ送りを代表とする動物神を送る際の儀式用の花矢と呼ばれるもので「先端五六寸の木は鎬矢状に削り、その先端(etu)を五分程細くして、その基部にチロシキケ(chiroshi kike)の削掛けを施したもので、この部をアイチロシ(aichiroshi)と云ふ。……この文様表現によって各地に於てこの放つ矢の役割が定められて居る」とされる。

2は、日高地方の仕掛弓(amappo)で「羽を附さず〔ず〕太い中抽〔抽=軸〕に矢柄と長い竹の矢の根が点線の如く両方から挿込まれて居る」という。

3は狩猟用の竹の軸の矢とされるものである。「中抽マカニ〔マカニッ makanit〕は骨製でこれに竹製の矢の根(rum)が挿込まれて居る。……最下端〔左端〕の切断面の如く溝の内に中軸を入れる。然して竹の内面をルムチップ(rumchip)とて船形に削り、これにブシを盛りて毒矢として放つもの」とされるもので、図2の一般的な弓矢と同種のものである。

4・5は鉄鏃を挿入したもので、4には木製の中柄がついているが、5は中柄がなく有柄の矢尻と矢柄の「接着部を糸に巻いてその上を〔に〕松脂を塗布したもの」とされる。ここにいわれるルムチャ(矢尻の舟)は、矢毒を塗り込めるためのくぼみであるが、矢尻全体の30~70%、平均50%を占めるともいわれ、矢尻の重さの3倍以上の毒量を塗り込むことが可能であるともいう(難波1982)。以下、このルムチャを「毒窩」と呼ぶことにする。

では、アイヌの弓矢の一般的理解の例として名取武光(1985)が示した図と説明を見ておこう。図4がそれである。

1・2は樺太アイヌの古い狩矢で、有柄の鉄鏃は松類の矢柄に挿入されている。

3は樺太アイヌの儀式矢で、1・2と同様の挿入法である。

4は空知アイヌの魚矢で、サビタ製の一本作りである。

5は北海道アイヌのクマ送り用の仕止め矢で、骨製中柄の先端を尖らせてある。

6~9は北海道アイヌの狩矢で、6は古いとされる。9はウサギ用の狩矢である。

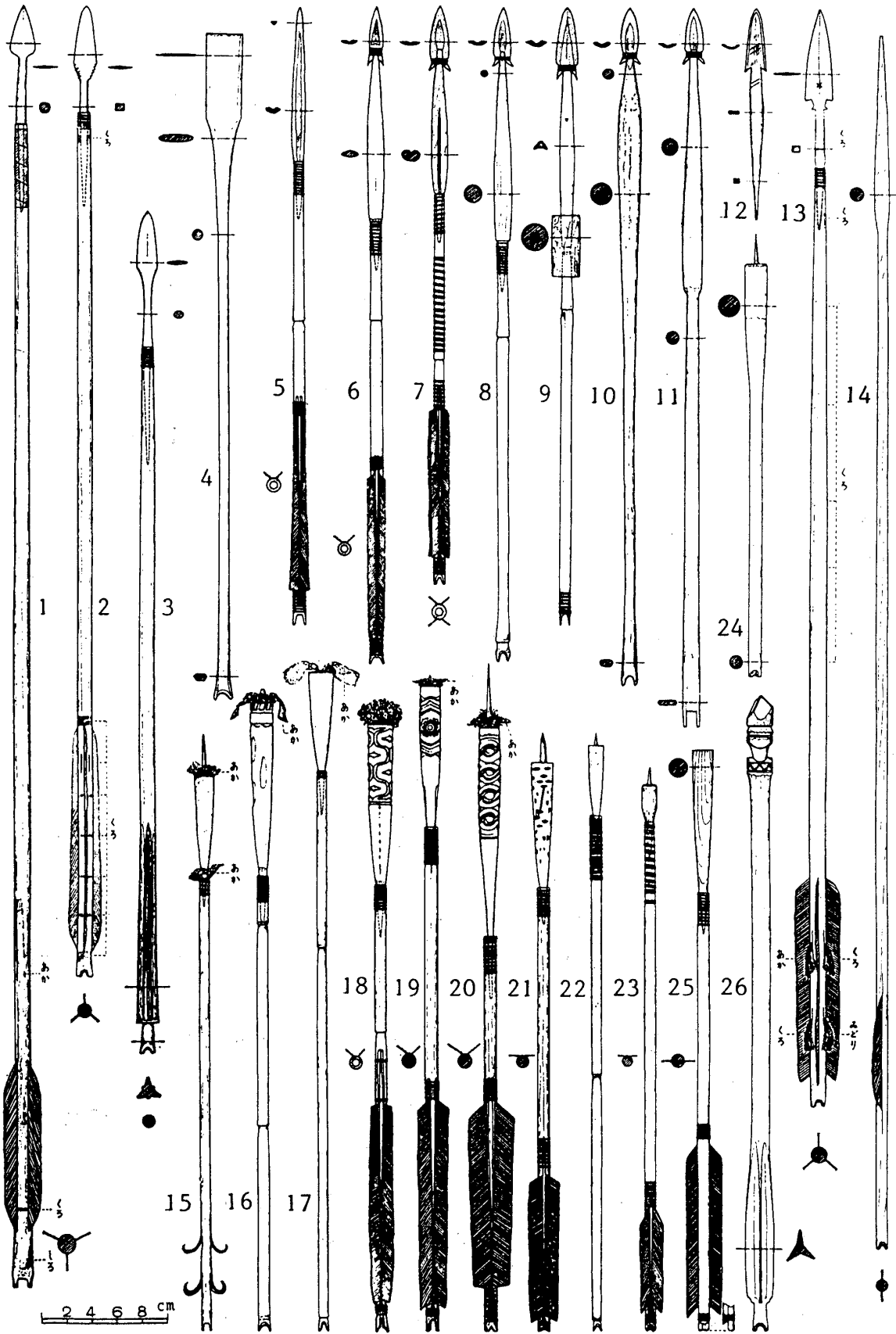


図4 アイヌの各種の弓矢 (14: ニヅヒ・ウイльта)

10～11は北海道アイヌの仕掛弓の矢である。木製矢柄は一本でできている。

12は樺太アイヌの手作りの銅鏃。

13は樺太アイヌの儀式矢。

14はニヅヒとウィルタの儀式矢で、樺太オタスの例である。

15～25は北海道アイヌの各地の花矢である。地名は省略する。

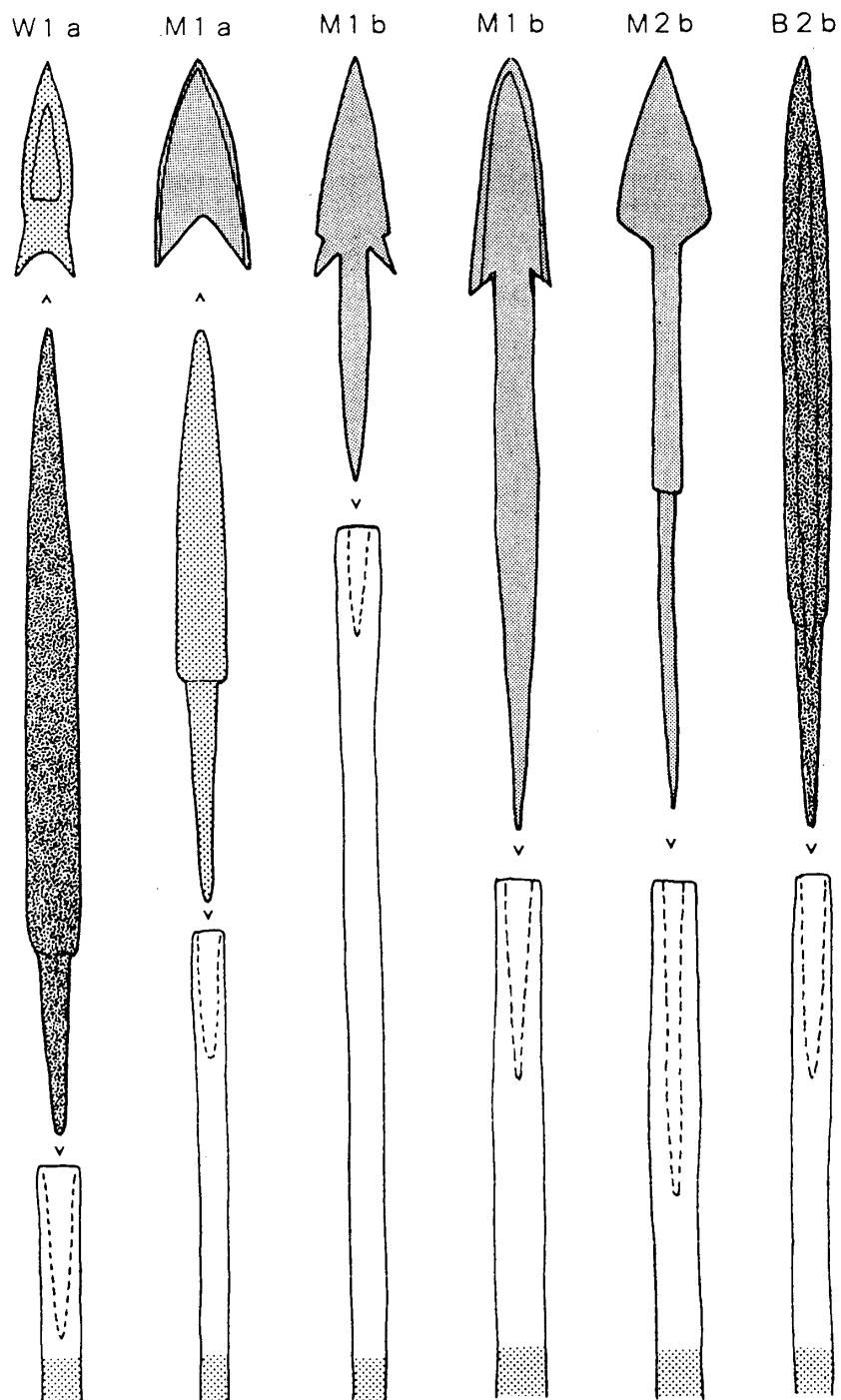


図5 狩矢用矢尻の形態分類

26は樺太アイヌの子供の遊び矢である。

以上の諸例によって、北海道アイヌあるいは樺太アイヌの弓矢と矢尻（鏃）の一般的な様子が理解できることになる。なお、外国人による北海道アイヌの弓矢の紹介もある。例えば、A. Leroi-Gourhan は1938年の北海道での調査をもとに竹鏃を紹介している (Leroi-Gourhan 1979)。また H.—D. Ölschleger は、Frankfurt MfVK 資料や Bremen Überseemuseum 資料を使いながら、北海道アイヌや千島アイヌの竹鏃・鉄鏃を紹介している (Ölschleger 1989)。ともに今まで述べてきた種類に属するものである。さらに、R. Hitchcock はスミソニアン研究所の仕事として、1888年の千島アイヌの調査さらに北海道各地の調査をもとに、狩猟具や漁労具に関しても関心を払っている (Hitchcock 1892)。図4-5・6に類する矢が4点図示されている。

ちなみに、C. A. Bergman, E. McEwen & R. Miller は弓矢全般に関する概説論文を表しているが、アイヌの例については触れていない (Bergman et al 1988)。

ここで、今までのまとめとして、アイヌのいわゆる民具資料に見られる弓矢の矢尻の形態分類を行っておくことにする。図5に模式的に示しておいたように、矢尻の素材は、W：木製（竹製）、M：金属製（鉄製と銅製）、B：骨製に分類できる。他に、図には表現していないが、考古資料としてはS：石製のものが存在する。また、1：逆刺（アゲ）有り、2：逆刺無し、さらに、a：無茎、b：有茎、という分類も行える。これらを組み合わせて、「W1 a」というように呼ぶことにする。さらに体部に有溝のものがあるが、その場合は「両面有溝B 2 a」あるいは「片面有溝B 1 a」というように呼ぶことにする。B 2 bとして図示したものは、骨製の中柄の先端を鋭くして矢尻としているタイプである。

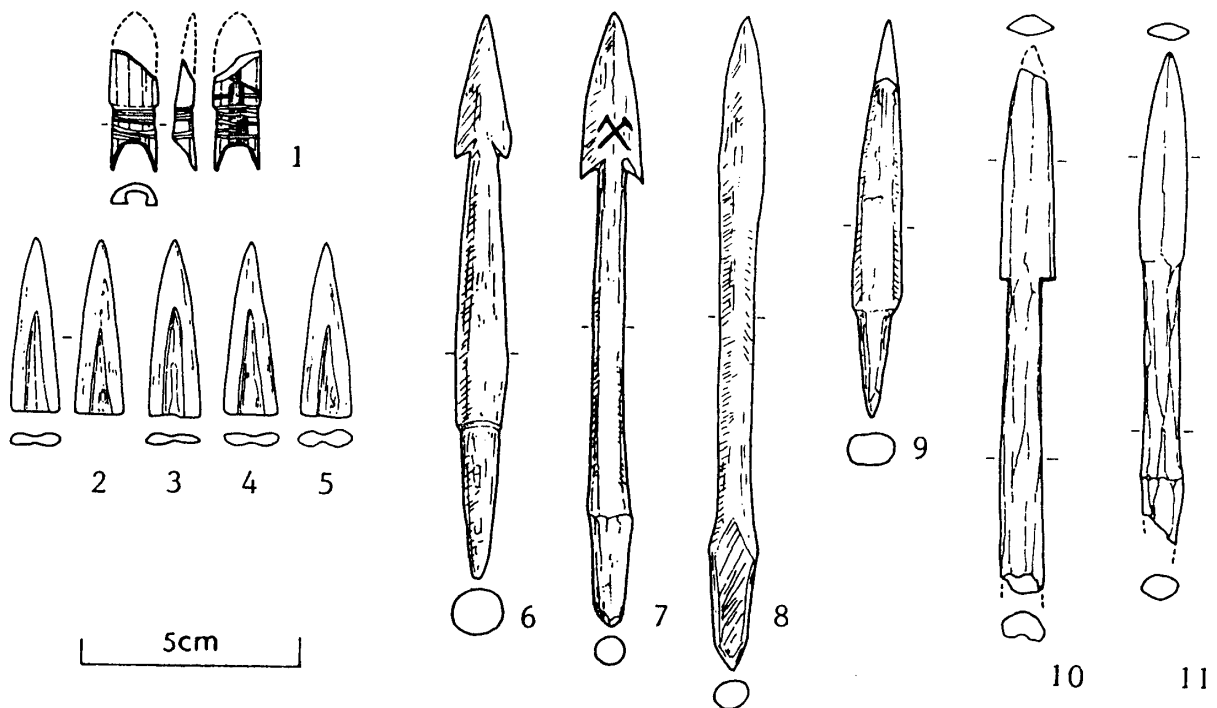


図6 アイヌ文化期の骨鏃類（北海道）

なお、ここでの分類には仕掛弓用の矢尻あるいは儀式用の弓矢の矢尻、さらに魚用のそれを除外して考えておく。つまり、ここでの扱いは狩矢用の矢尻とされているもののみ限定したい。さらに付記すると、矢尻を挿入する中柄の材質には骨製（エゾシカの骨製が多いようである）と木製があるようである。矢柄は木製が基本となっているようである。では、以下に発掘資料ならびに北方諸族の民族資料などを概観していこう。

## 2 発掘資料としての矢尻（鏃）

### 2-1 北海道のアイヌ文化期の資料（図6・7）

1は、千歳市末広遺跡 I P-60号墓の成年男性の副葬品として出土したものである。竹（チンマザサ）製で、推定長は3.8cmである。裏面にはオープン・ソケットが認められ、骨製中柄が装着されていたものと考えられている。ソケットの上部にも溝が見られるが、矢毒を塗り込むためのルムチ（毒窩）である。毒窩付き片面有溝W1 aタイプとすることができる。この墓の副葬品には、

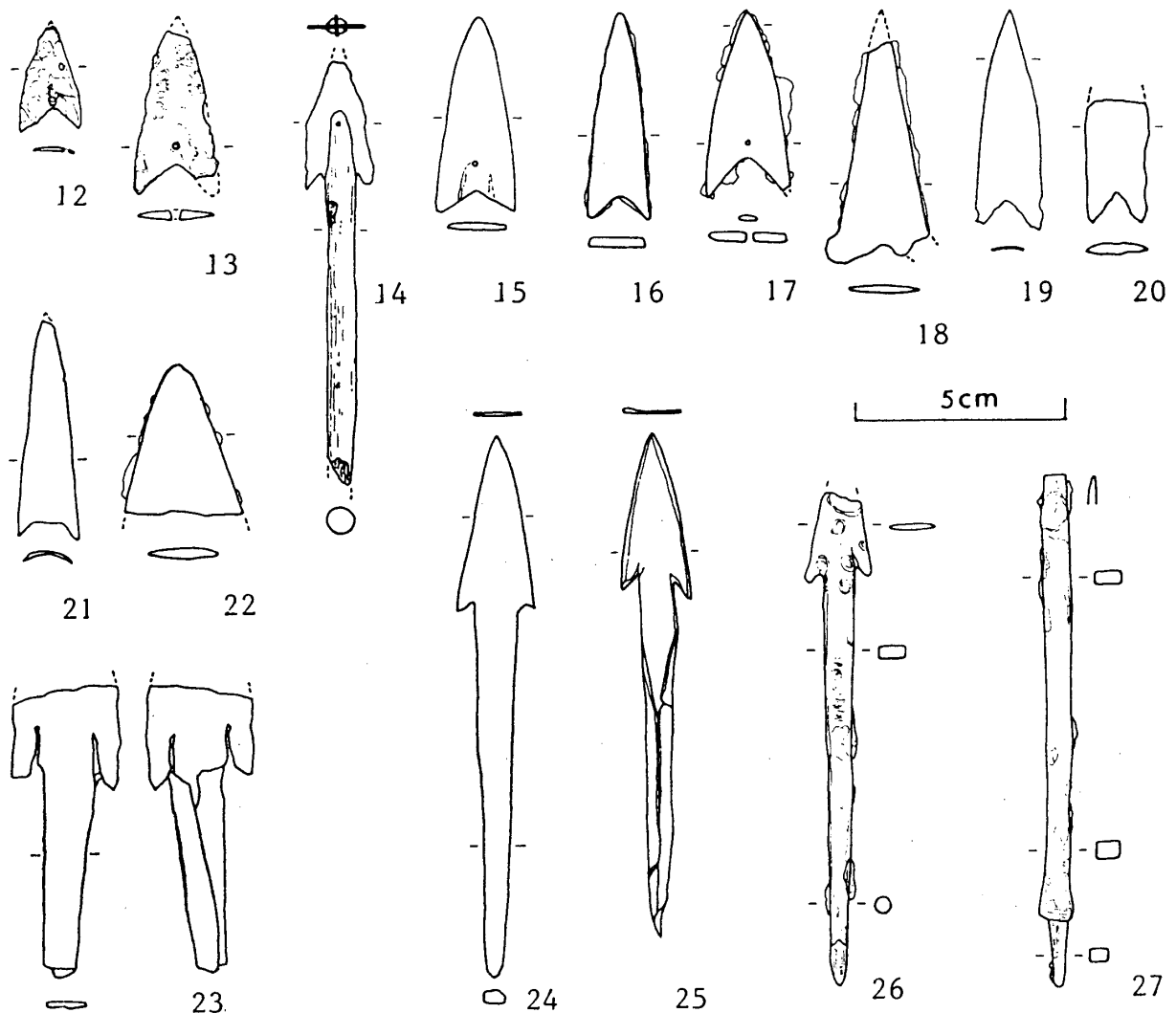


図7 アイヌ文化期の鉄鏃類（北海道）

他にB1b、B2bタイプの有柄のものもある。17世紀中葉～18世紀初頭と考えられている。

2～5は、美唄市3号溜池遺跡出土の骨鏃である。報告者は時期不詳としているが、後で説明するようにアイヌ文化期のものと考えてよい資料である。長さは3.8～4.0cmで、幅1.2～1.3cmである。厚さは0.3cm。狭長な二等辺三角形を呈し、両面とも全面研磨され、表裏の基部に溝を有する。両面有溝B2aタイプといえる。

6～9は、網走市モヨロ貝塚第1地点上層アイヌ墓出土とされる骨鏃である。6・7はB1bタイプ、8・9はB2bタイプとすることができる。

10は、千歳市末広遺跡IP-14号墓出土の骨鏃である。B1aタイプに属する。11も同IP-54号墓のB2bタイプの骨鏃である。当遺跡では30基のアイヌ墓が発掘されているが、以上に紹介した他にIP-45・60号墓でもB1bあるいはB2bタイプの骨鏃が見られる。ちなみに、考古学的な発掘調査によるアイヌ墓は100例以上を数えるが、骨鏃などの矢尻が副葬品として検出されたのは、ここに紹介した5例のみである。中柄は12例の墓に伴っているが、これらの数字の偏りが何を意味するのか検討の余地が残されている。

また、図示しなかったが斜里町オショコマナイ河口東遺跡(松田・萩野 1993)、上ノ国町勝山館跡(松崎他 1983)などの他の遺跡でもB1b・B2bタイプの骨鏃が出土している。

以下に、図7に示した金属製の鏃を見ることにする。

12は、平取町ポロモイチャン跡遺跡A郭の炉址出土の鉄鏃である。後藤守一(1939)分類で無茎の狭鋒腹挟長三角形式と報告されている。M1aタイプである。基部に小孔が見られる。同タイプのものに13がある。同町二風谷遺跡出土品でやはり無茎の狭鋒腹挟長三角形式と報告される。

14も二風谷遺跡1号墓に伴った鉄鏃で、クジラの骨を用いた中柄が残存している。M1aタイプである。この資料に伴出するものとして26・27がある。26は、M1bタイプであるが、篋被狭鋒平造腹挟三角形式と報告され、断面長方形の篋被ぎと円形の茎を有するともいわれる。27は、先端部(鋒部)が斧先形を呈するもので、篋被方頭細根斧箭式と報じられているやや特殊な鉄鏃である。

15～21はM1aタイプのもので、19・21が銅製である他は鉄製である。15は、阿寒町シュンクシタカラ遺跡C2地点貝塚出土で、基部に小孔がある。図示しなかったが、M1bタイプの長さ13.5cmの鉄鏃も伴っている。16は、網走市浜藻琴神社貝塚出土で18世紀頃のものと考えられる。なお、同貝層出土品としてB1bタイプの鏃も見られる。17は、釧路市材木町5遺跡出土のものであるが、基部に小孔が残っている。アイヌ期と報告される。18は、斜里町オンネベツ川西側台地遺跡貝塚9出土のものである。これには23のM1bタイプに入れてよいものが1点伴っており、幕末～明治初頭のものとして報告されている。それは銅製でひじょうに薄くて実用品ではないとされる。19は、苫小牧市弁天貝塚の銅鏃で、幕末～明治初期といわれる。また「薄く細身で、基部が逆V字状に挟入」しており、「弓や仕掛矢の矢の先に取り付けられるものである。なお、タイプは異なるが、植村遺跡〔植村A遺跡〕からも銅鏃が1点出土している」(佐藤編 1987:48)とされる。それは、佐藤一夫(1975:287)報告の写真図版によると、M1bタイプと考えられるもので、他にM1aタイプ



らしい鉄鏃も出土している。20も同市弁天貝塚出土のM1 a タイプの鉄鏃である。やはり幕末～明治初期のものとされる。25は、同貝塚出土の銅鏃でM1 b タイプのものである。他にもM1 b タイプの破損品1点が見られる。21は、斜里町オンネベツ川西側台地遺跡出土の銅鏃でM1 a タイプである。他に22の鉄鏃らしいものがあるが、他の資料と比較して大型であるので銆先用とも考えられる。また、M1 b タイプの24の鉄鏃も出土している。

2-2 千島のアイヌ文化期の資料 (図8)

28・29は、千島出土の新石器時代のものとされる鯨骨製の鏃と中柄である。片面有溝のB1 a タイプと考えられる。新石器時代遺物として他にも写真の紹介があるが、それらにはオホーツク文化期のものとアイヌ文化期に属するものが含まれているようであるので、ここでは当該資料をアイヌ期として扱っておくことにする。

鳥居龍藏による千島アイヌの鏃の説明があるので、ここで紹介しておこう。「鏃 (アイ = aini) には二種類があった。一つは最古のものと考えられる鯨骨製で、先端に小さな孔 (エパイ epai) が

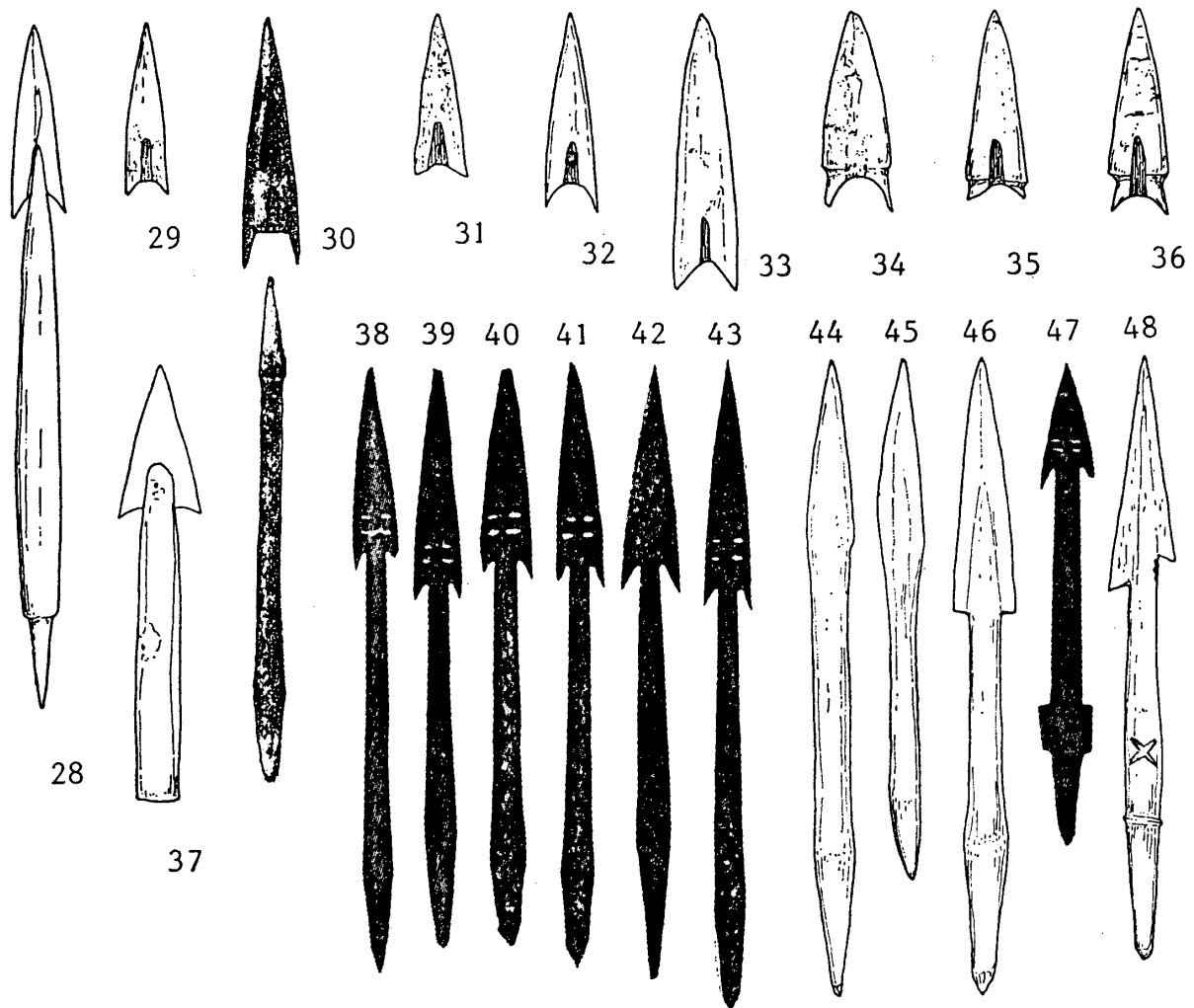


図8 アイヌ文化期の骨鏃 (千島)

あり、そこに猛毒をつけ、射込まればどんなものでも確実に死んだ。蝦夷アイヌおよび樺太アイヌも同様の慣習をもっていた。……もう一方の鏃は前者より入念に作られた黒曜石製（アンジ＝アイピ andji-aipi）であった。この黒曜石製の鏃がはめ込まれる矢柄の上端は必ず鯨骨製で、下方の矢柄には柳の木が用いられた。……千島アイヌは最近まで石鏃を作っていた。古老のニセフォールやアレキサンダーは、若い頃自分たちで遊び用の骨鏃を作ったと私に明言している。したがって、鉄製の鏃が広く一般に使われるようになったのは、ここ四、五十年來のことにすぎない」（鳥居 1919：456-457）。さらに、鳥居は別の書で鏃の説明をしている。「これは鯨の骨で出来て居る、チロスと云ふ骨柄が付き、これに木の柄が又附て之に鷲の羽根が附いて居る」という（鳥居 1903：190-191）。すなわちチロスと呼ばれる鯨骨製の中柄と組み合わされるのである。

さて、30は占守島潮見川の墓の副葬品の一つである。20数本の骨鏃中の1点であるという。毒鏃と報告され「骨鏃先と骨柄が分離して合体して骨鏃をなすもので、骨鏃先の窩中に毒を入れて、射突の際骨鏃先のみ獲物の体中に残す仕組がしてある」（馬場 1936：117-118）といわれる。写真がやや不鮮明で詳細は不明であるが、北海道アイヌの矢尻と同じように、毒窩（ルムチッ）がある例である。毒窩付き片面有溝B1aタイプといえる。

なお、38～48は同副葬品の骨鏃であるが、38～43・46～48はB1bタイプ、44・45はB2bタイプとすることができる。さらに、38～41・43・47・48には記号が刻印されているが、中でも48の×印は、アイヌのキムンカムイ（クマ）を表現したイトッパあるいはシロシ（所有印）に類似するものである。

31～36は、占守島別飛川左岸第3貝塚（別飛アイヌ墓地裏手砂丘貝塚）出土の骨鏃である。31～33は片面有溝B1aタイプで、34～36は「下端に於いてチロスの先端と結びつくべき糸の結縛のため、両側に小浅溝がほられてゐる、アイヌの竹鏃先と同一である」（馬場 1936：117）とされるものである。35・36は、片面有溝B1aタイプであるが、34は有溝か否か不明である。他にB1bタイプ、B2bタイプの鏃も出土している。

37は択捉島シャナ貝塚出土の銅鏃で、骨柄はレプリカとされている。M1aタイプであるが、図示しなかった鳥管骨を斜めに切った骨鏃も出土している。そしてそのタイプは「内部の窩洞中に毒を入れて射出したもので……国後及び根室北見辺よりも発見せられてゐる（馬場 1936：118）といわれている。

### 2-3 オホーツク文化期の資料（図9）

北海道のオホーツク文化に属する骨鏃は各遺跡で出土しているが、中でも、礼文島香深井A遺跡における多量の出土例が参考になる。そして、素材の選択・形態・装着部の状態などで次のように分類されている（大場・大井編 1976：94-96）。基本的な場合の説明をしておく。

I型：細い棒状の素材を葉形にしたもの。装着部がクサビ形に加工される場合もある。大場利夫（1955）分類のB型（図9-49）。

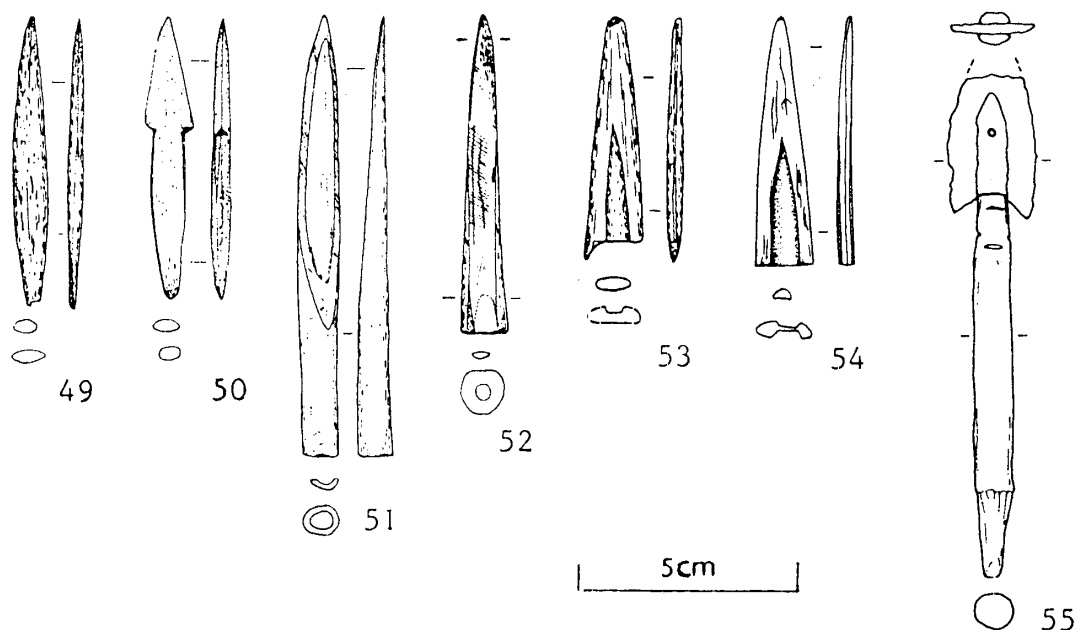


図9 オホーツク文化期の骨鏃

Ⅱ型：扁平な棒状の素材から頭部と茎部を区分しているタイプ。アゲが作られる場合もある。大場分類C型（図9-50）。

Ⅲ型：鳥管骨の一端を斜めに切って尖頭部を作ったタイプ。大場分類D型（図9-51）。

Ⅳ型：体部断面が円形に近く、一端に尖頭部を作り、基部に中柄が挿入されるソケットが穿たれているもの。大場分類E型（図9-52）。

V型：三角形を呈する無茎のタイプ。着柄のための溝が片面あるいは両面に見られる。2例のみの出土であり、稀有な例である（図9-53・54）。

以上であるが、香深井A遺跡分類のⅠ～Ⅳ型が一般的であることは、モヨロ貝塚出土の資料を見てもわかる通りである。ここで注目しなければならないのは、V型とされる図9-53・54に示した資料である。それは前述のアイヌ文化期の資料に類例がいくつか見られるもので、図6-2～5あるいは図8-28～36の資料と同じタイプと考えられる。つまり、片面有溝B1 aそして両面有溝B2 aタイプとしたものに酷似するのである。それらの香深井分類V型の資料は、53が1号d 堅穴住居址埋土、54が魚骨層Ⅳの出土であるが、香深井分類Ⅰ・Ⅱ型は魚骨層Ⅳ（刻文系・刺突文系土器群の段階）に多く、同Ⅲ型は魚骨層Ⅳではまったく出土せずに1号d 堅穴床面以降（刻文系土器群の段階）の時期にのみ見られるといわれる（大場・大井編 1981：387）。54の香深井分類V型の資料は魚骨層Ⅳ出土であるが、やはり報告者が説くように、出土量が少ないことから時期的な変化はまだトレースできないといえよう。

図9-55に示した資料は、礼文町浜中2遺跡出土のものである。M1 aタイプであり、オホーツク文化期のものとしては数少ない例といえよう。同遺跡では、他にも香深井分類のⅠ～Ⅲ型に属する骨鏃が見られる。

では、千島におけるオホーツク文化期の骨鏃はどうであろうか。幸い、馬場脩がそれについてま

とめているので紹介してみよう（馬場 1936）。

- a : 先端を尖らした細長い骨針様のもの
- b : 形態前者と同一なるもアゲを有するもの
- c : アゲを有し先端に石鏃を附する溝を有するもの
- d : 有柄骨鏃

以上の4タイプに分類されている。a～cタイプは北千島のオホーツク式土器を出土する貝塚および竪穴住居址に特有な形式とされ、南千島では出土例が無いとされている。dタイプの有柄骨鏃は香深井分類のⅡ型に属するものであるが、北千島の占守島潮見川貝塚あるいは南千島の択捉島シャナ貝塚から出土している。なお、これら千島の諸例に対して、樺太における骨鏃は明確な出土例はないようである。

#### 2-4 カムチャツカ方面の資料（図10・11）

最近注目されているカムチャツカ半島の資料は、北海道あるいは千島のアイヌ文化との類似を示しており、北方地域の文化接触を物語るものとして重要である。図10にその一部を紹介してみる。

図10-1は、カムチャツカ半島南端部のロバトカ岬に位置するロバトカⅠ遺跡の小貝塚から出土したものである。それは前田潮によって「三角形を呈し、柄を着装する茎槽と形象的な中心距をもつ無茎の品」（前田 1985：70）と説明されている。片面有溝B1 aタイプといえるものである。さらに「有茎で丸みを帯びた基部のもの、先端が丸みを帯びたもの—小形毛皮獣に用いる—、毒を塗るための凹みを鏃の先端部の面に有するもの（第17図1～4〔本論図10-2～5〕）などがあり、その大きさは様々である（基部を含んで8～18cm）。……これらは、獣類の肋骨や、鹿の角からつくられている。同じ材質で、左右対称あるいは、非対称のカエシを有する骨鏃もつくられている（第17図5～10〔図10-6～10に一部を示した〕）。一部の鏃には、一、二ヶ所に斜十字の形をしたタムガ（所有者印）が認められている」（pp. 69-71）とされている。図10-2～10は、B1 bタイプと同じであるが、すでに注意されたように、2～5には矢毒用の毒窩が見られ、アイヌ文化との関連を強く感じさせるものである。同様に、図10-7の刻印もアイヌ文化との関連が強いものである。なおこれらの遺物の年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $380 \pm 50 \text{BP}$ （MAГ-315）と出されているが、報告者は17世紀後半と考えている。

11は、前遺跡の近くに位置するアンドリアノフカ遺跡出土のものである。1と同様に片面有溝B1 aタイプに属するものである。12～17の骨鏃は有柄で、B1 bタイプに入れてよいであろう。16には毒窩が見られ、4と同タイプである。 $^{14}\text{C}$ 年代で $570 \pm 40 \text{BP}$ （MAГ-307）と出ているが、14世紀の内耳土器をもつ新アイヌ文化とされている。

18の資料は、オホーツク海北岸のスタニョコヴィチャ遺跡出土のものである。B2 bタイプに属するが、柄は短いものと思われる。報告者は同じくオホーツク海北岸のアタルガン遺跡に類例があるとしている。それは、P. C. Васильевский (1971) 報告の図XXI-6に相当するものと考えられる。

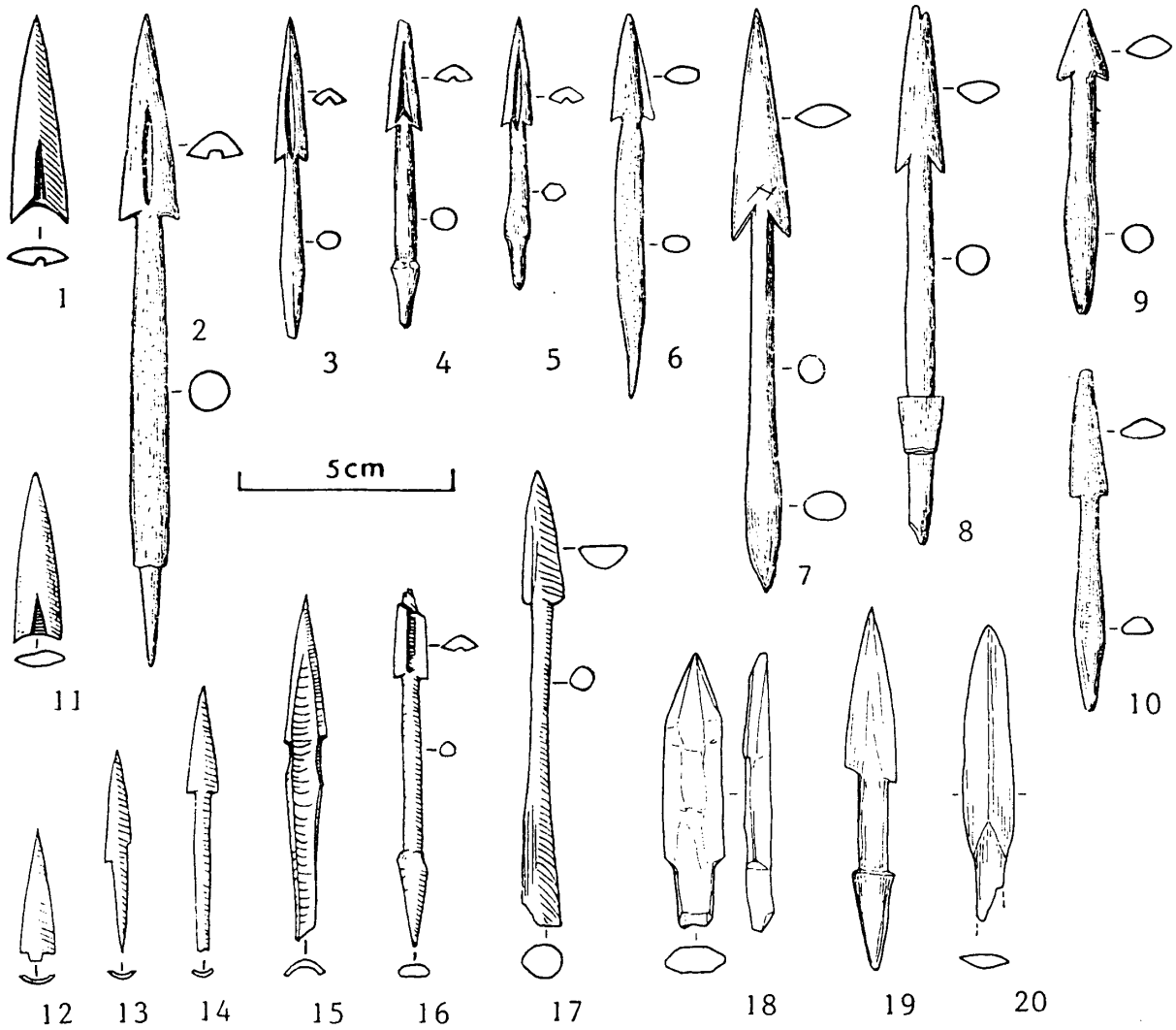


図10 カムチャツカ方面の骨鏃

アタルガン遺跡は古コリャーク文化のアタルガン期のタイプサイトであり、10～13世紀の年代が考えられている。スタニューコヴィチャ遺跡もそのアタルガン期と報告されている。アタルガン遺跡では他にB 1 bタイプの骨鏃も出土している (p. 213 図XIV-11, p. 216 図XIX-5・7, p. 216 図XX-6・7)。他については割愛する。

19・20は、スタニューコヴィチャ遺跡近くのスパファリエヴァ遺跡の資料である。19はB 1 b, 20はB 2 bタイプに属するといえる。この遺跡は、最近注目されている北海道のオホーツク文化に類似するオホーツク海北岸のトカレフ文化に属するものである。ただし、その年代は前2,000年紀中葉～前1,000年紀とされており、少し古すぎるようである (菊池 1993, 山浦 1993)。いずれにせよ、「環オホーツク文化」というリンクの中で注意していきたい骨鏃である。

さらに、カムチャツカ半島の新石器時代 (developed neolithic) の遺跡からも類似の骨鏃の報告がある。たとえば、S. I. Rudenko はB 1 b, B 2 bタイプのものを紹介している (図11)。そして、カムチャツカで発掘された骨鏃は3グループに細分されている。つまり、「単純形」「アゲ付

き」「鈍い尖端部のもの」である (Rudenko 1964 : 273)。さらに、北海道のものと同類似するアゲ付きのタイプについては、以下のように述べている。

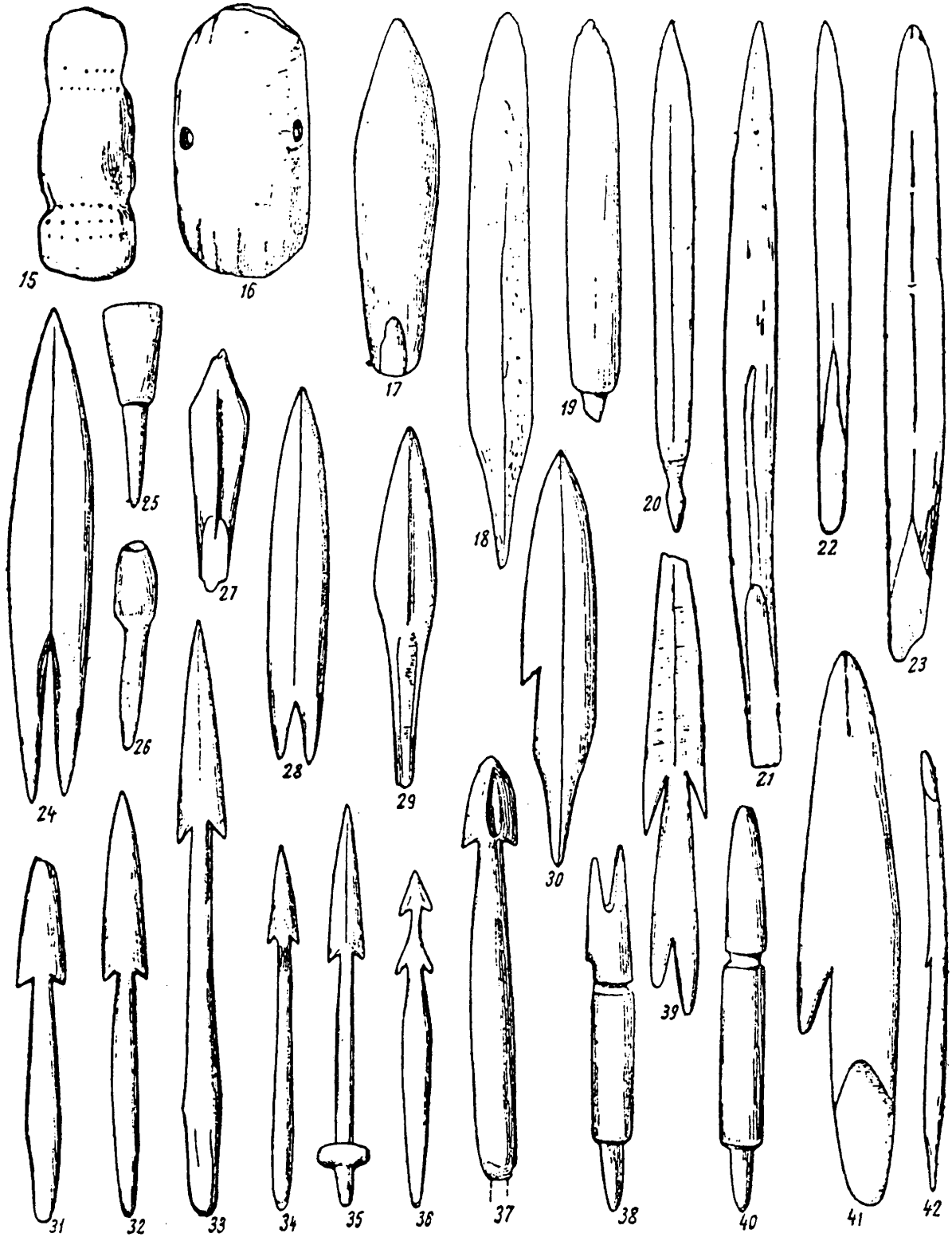


FIGURE 3.

図11 カムチャツカの骨鏃他

「第二のアゲをもつ骨鏃は少なからぬ変化をもっている。このグループに属する第一のタイプは、幅広で平たいもので、単純形のものとは一つあるいは二つのアゲをもつことで区別される。それらは、平坦なクサビ形の基部をもつか有茎であるかということで二つのサブタイプを生じている。そのような骨鏃は、北東部のオリュートルスク湾とオマヤン湾（30・39, 41）のみで知られている。第二のタイプは、幅の狭い長いアゲを有するものである。細かな部分では変化しているが、すべて有茎である（31～36・42）。このような骨鏃は、唯一ロバトカ岬で発見されていたが、アイヌ文化に特徴的な骨鏃のグループに属している。また類似のものは、すでに鳥居〔龍藏〕によって北千島の発掘で発見されている。また同種のグループで太い骨鏃のものは、南カムチャツカのクリルスコエでも出土している（37）。長いシャフトの頭部は断面がほぼ円形で、尖った先端の二つのアゲをもち、薄い基部の断面は環状である。葉状の先端の両面は平らになっているが、その一面には深い溝をもっている。この溝は毒を貯えるために役立つものである。このタイプの鏃は、発生的には、骨鏃挿入のタイプのものにつながるものであり、鳥居によって北千島で発見されている」（Rudenko 1964：275）。

この最後の説明の北千島出土例にある註では、すでに紹介した図8-28・29が引用されている。また図11-37のものは、北海道アイヌのルムチマに似た溝（毒窩）を有しているという点を指摘しているのは卓見である。よって毒窩付きB1bタイプとすることができるものである。

ちなみに、H. H. Диков（1979）はチュクチ半島出土の骨鏃を紹介している。図は割愛するが、<sup>14</sup>C年代で500±50BP（JE-674）と出されているヴァカレヴォ文化のもの、あるいは16世紀末まで続いたプヌーク文化のものなどであるが、そこにはもはやアイヌ文化につながる要素を見出すことはほとんどできない。B1bタイプのものは、ごくわずかに存在するようであるが、むしろアゲが多段になったり、片側のみのアゲのタイプが増加する傾向にあるようである。

### 2-5 ヤクーチャの資料（図12）

ここで紹介するのは、18世紀段階のヤクート（サハ）文化に属すると報告される骨鏃の発掘資料である。図12-1～3は、ジェフソゴンスキー村13号墓から出土したものであるが、特徴的な基部を作出しているタイプである。他に細身のM2bタイプの鉄鏃も伴っている。同図4は、オクチャブリスキー村21号墓出土の骨鏃で、同文化に属するものである。これにも細身のM2bタイプと思われる鉄鏃が伴っている。

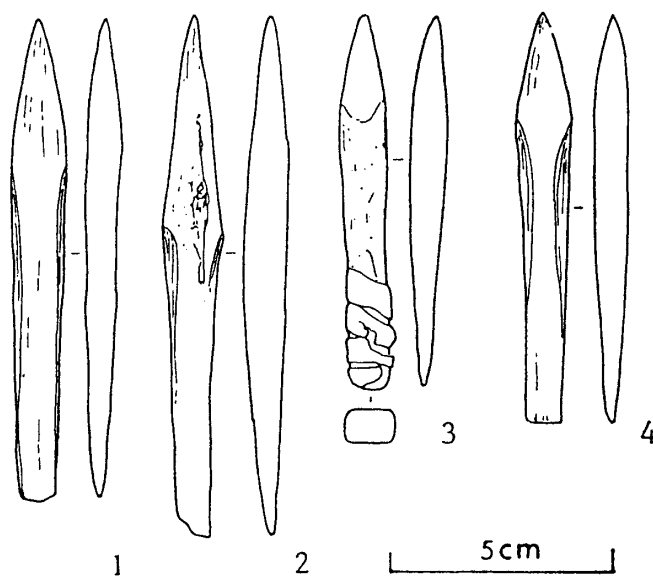


図12 ヤクーチャ出土の骨鏃

このような骨鏃は12例の出土例があるらしいが、紹介者の И. В. Константинов (1971) は三つの形態があるという。第一のタイプは7例あり、いわゆる鏃矢に属するものである。第二のタイプはここで紹介した4例のものである。四角形の断面で、先端部はピラミッド形を呈しており、幅広の柄がついているものである。先端部はじゅうぶんに長く、横断面は長方形である。長さは大きなもので12.5cmを測る。第三のタイプは1例のみであり、鈍い〔平らな〕先端で、長い茎部をもっている。先端部の横断面は円形である。同様のタイプはチュクチでも見つかっている。以上であるが、第三のタイプに類する木製の鏃の出土例もわずかに見られるとされる (p. 118)。

## 2-6 沿海地方の資料 (図13・14)

では、北海道と近い位置にある沿海地方方面の出土資料を見ておこう。まず、渤海時代 (698～926年) 前後の諸例を見ておく。幸い、Л. Е. Семениченко (1976) がアヌーチンスキー区に位置するノヴォガラドィェフカ集落址他の資料を紹介することで、鉄鏃などについて概観している。それによると、鉄鏃については三つに大別されている。以下にその一部を見ておく。

第1は、三葉形鏃とされる図13-1に示したものである。断面に三稜を有している。アムール中流域では4～8世紀の遺跡で発見されているとされ、シベリア、アルタイ、トゥヴァ、カザフスタンでは6～10世紀に広まっていた。東ヨーロッパではおおむね10世紀までであるという。

第2は、扁平鏃とされているものである。沿海地方では8～10世紀の遺跡から出土している。9タイプに細別されている。

タイプ1 (図13-26) 二つのアゲを有するものである。アムール中流域では4～8世紀、沿海地方の女真の土城では12世紀～13世紀初頭の年代が与えられている。

タイプ2 (図13-27) 細い頸部をもつ三角形鏃である。沿海地方のクルグロイ・ソプカ遺跡では8～10世紀の土層で出土している。アムール中流域の靺鞨文化の遺跡では4～8世紀、沿海地方の女真文化の遺跡では12～13世紀初頭、東ヨーロッパでは8～14世紀の年代が与えられている。

タイプ3 竜骨形のものである。先端部の断面形で二つの亜タイプに分けられている。その一つは両凸レンズ形のものである (図13-6・28・45)。アムール中流域のトロイツコエ墓遺跡では7～8世紀、東ヨーロッパでは8～9世紀もしくは10世紀という年代が示されている。別の一つはZ字形のもの (図13-29・33) で、クルグロイ・ソプカ遺跡では前のタイプと同様に8～10世紀の土層で出土している。類例は沿海地方のシニィ・スカルィ遺跡 (5～8世紀)、シャイギン土城 (12世紀後半～13世紀初頭) などで出土している。

タイプ4 (図13-3) 長い扁平な先端部をもち、中央部がふくらんだ菱形のものである。断面はZ字形である。類例はシャイギン土城でも出土している。

タイプ5 (図13-4・5) 尖った先端をもつ葉形のタイプである。横断面は両面あるいは片面凸レンズ状やZ字状である。



アイヌ自製品の研究—矢尻—

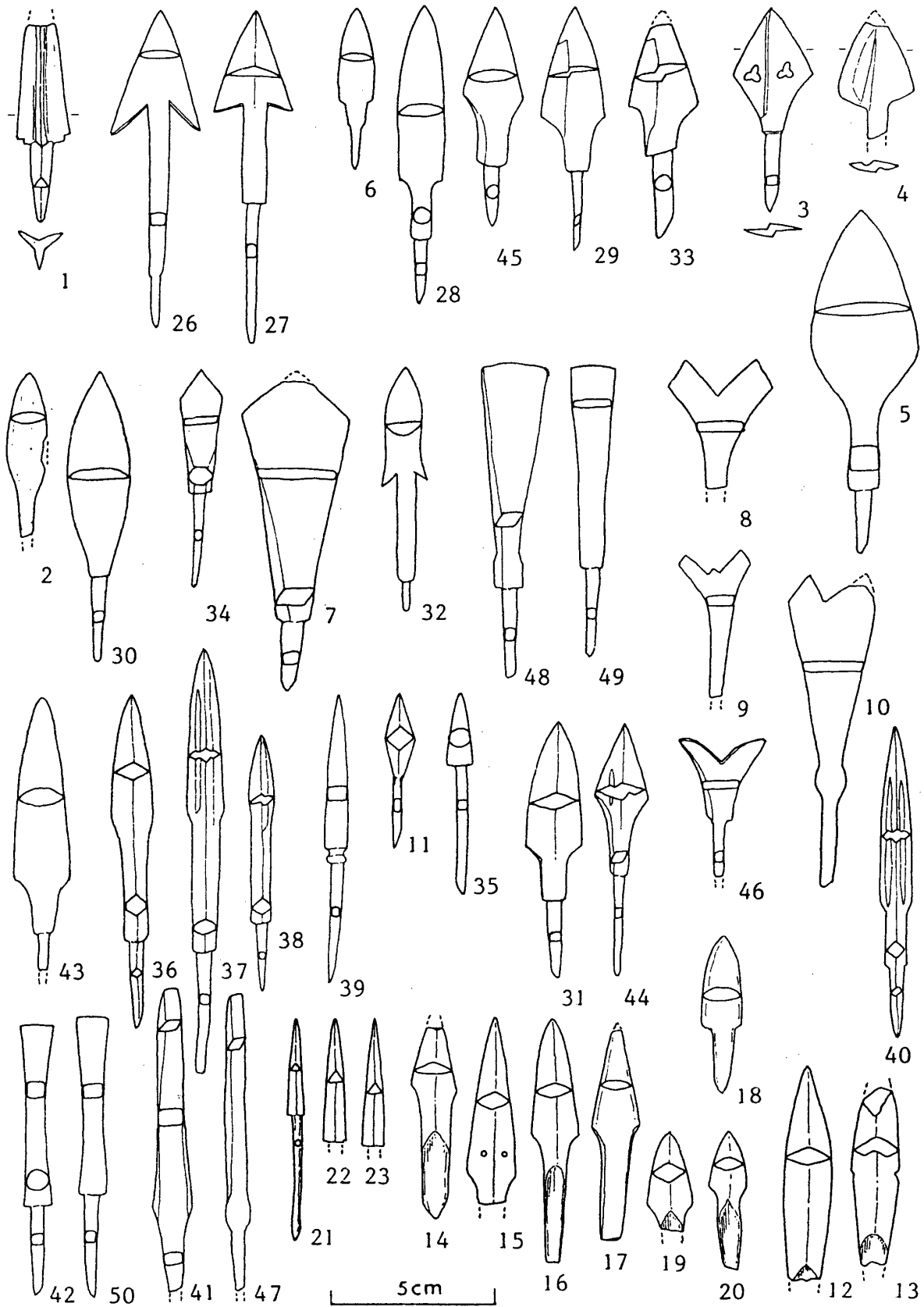


図13 ノヴォガラドィエフカ遺跡 (1~25), クルグロイ・ソプカ遺跡 (26~42), マリヤノフスコエ土城 (43~50) の鉄鏃・骨鏃

タイプ6 (図13-2・30) 月桂樹葉のものである。横断面は両面凸レンズ状。クルグロイ・ソプカ遺跡やノヴォガラドィエフカ集落址では8～10世紀の土層で出土している。類似品はシニィ・スカルィ遺跡(5～8世紀)、沿海地方の12世紀～13世紀初頭の女真時代の遺跡、アムール中流域の4～8世紀の遺跡で出土している。さらにカザフスタンでは8～9世紀、高句麗時代の遺跡(前1世紀～後7世紀)、東京城址から出土している。また、東ヨーロッパでは9世紀に出現している。

タイプ7 (図13-34・7) 先端部が三角形に切られているタイプである。クルグロイ・ソプカ遺跡では8～10世紀の土層で出土している。類例はカラコルムでも出土している。このタイプに似たものとして、図13-32のようなアゲを持つものもあるが、シャイギン土城でも発見されている。

タイプ8 鋤状に切られたもので、二つの亜タイプがある。図13-48は鋤の刃が広がった形のもので、クルグロイ・ソプカ土城やマリヤノフスコエ土城、クロウノフカ川(旧チャピゴウ川)盆地1号墓などでも発見されている。図13-49のタイプは鋤の刃が狭いもので、マリヤノフスコエ土城やクルグロイ・ソプカ遺跡で出土している。類例は、5～8世紀の沿海地方の遺跡で発見されており、また12～13世紀初頭の女真期の遺跡や4～8世紀のアムール靺鞨の遺跡、中世初頭の高句麗遺跡、北朝鮮の8～10世紀の渤海時代の遺跡などでも出土している。同時にシベリアにおいては、三角形鏃や三葉形鏃は5～8世紀の年代を示しているが、9～10世紀にも広く広がっていたといえる。モンゴルにおいては13～14世紀に優勢である。

タイプ9 (図13-8～10・46) 二本の角があるタイプである。類例はアムール中流域のミハイロフカ土城(4～8世紀)、沿海地方の渤海時代の遺跡やシャイギン土城などでも出土している。またカラコルムでも発見されている。

第3は、装甲鏃であるが、面トリがなされているものである。広く沿海地方の8～10世紀の遺跡で出土しているが、沿海地方の渤海時代のものは、8タイプに細別されている。

タイプ1 (図13-43) 細くて先が尖ったランセット形のものである。マリヤノフスコエ土城では8～10世紀の文化層から出土し、クルグロイ・ソプカ土城でも出土している。類例はトゥヴァのウィグルの遺跡(8～9世紀)や東京城址においても発見されている。

タイプ2 横断面が菱形のランセット形のタイプである(図13-36)。相対する面に溝が入るタイプもある(図13-37・38)。後者はアムール流域のルダニコヴァ・ソプカ遺跡の墓(11世紀)や沿海地方のシャイギン土城でも発見されている。

タイプ3 (図13-39) 四角形の横断面をもつピラミッド形のものである。類例はシャイギン土城で出土している。

タイプ4 (図13-11) 複ピラミッド形のタイプである。横断面は四角形で、柄部の断面は円形である。アムール中流域の靺鞨文化の遺跡で類例が出土している。

タイプ5 (図13-35) 銃弾形のタイプである。横断面は円形。クルグロイ・ソプカ土城の8～10

世紀の文化層から出土しているが、類例は沿海地方の12～13世紀初頭の女真の遺跡でも発見されている。

タイプ6 (図13-31・44) 横断面が菱形の竜骨形タイプのものである。44の例にはわずかに溝が入っている。アムール地方の中世の遺跡でも見ることができる。

タイプ7 (図13-40) 横断面が菱形の短剣形を呈するタイプで、四面に溝が入っている。類似品はシャイギン土城でも出土している。東ヨーロッパでは9～14世紀にかけて広く分布している。

タイプ8 鑿形のタイプで、二つの亜タイプに分けられる。一つは図13-42・50に示したようなもので、横断面は長方形である。クルグロイ・ソプカ土城、ノヴォガラドィエフカ集落址、マリヤノフスコエ土城などで発見されている。類例は高句麗、渤海、アムール流域の中世遺跡でも見つかっている。沿海地方の女真の遺跡からは大量に出土するものである。また、東ヨーロッパでは9～11世紀にかけて見られる。別の一つのタイプ (図13-41・47) は、横断面が平行四辺形のものである。マリヤノフスコエ土城やクルグロイ・ソプカ土城の8～10世紀の土層から出土しているが、類品はアムール流域でも発見されている。

以上が、沿海地方の渤海時代の有茎鉄鏃に関する紹介である。同時に、ノヴォガラドィエフカ土城出土の骨鏃についても、4分類がなされているので概略を記しておく。

タイプ1 (図13-21～23) ピラミッド形の三角形鏃である。アムール中流域の4～8世紀の靺鞨遺跡や6～8世紀のトゥヴァの古チュルク族の遺跡からも発見されている。

タイプ2 (図13-14～17・19・20) 菱形あるいは楕円形の横断面をもつ竜骨形タイプのものである。

タイプ3 (図13-18) 横断面が楕円形の月桂樹葉のタイプである。

タイプ4 (図13-12・13) ランセット形のものである。12は断面が菱形で、13の側面には抉りが見られる。

では次に、沿海地方における初期鉄器時代とされるものを見ておきたい。つまり、以下のような骨鏃や石鏃あるいは鉄鏃の報告例がある (Андреева et al 1986)。

図14-1・2は、ヤンコフスキー文化に属するものでペスチャヌイ1遺跡出土の骨鏃である。2は有溝B2 aタイプとすることができる。

3～9の資料は磨製石鏃であるが、6の断面観は有溝のようである。3～5はS2 aタイプ、6～9はS2 bの有茎タイプである。

15の資料は、ヤンコフスキー文化のチャパエヴォ遺跡出土の骨鏃であるが、2に類するもので有溝B2 aタイプである。他にS2 aタイプの磨製石鏃も出土している。

なお、図14-3～9のような磨製石鏃は、他のスラビャンカ1遺跡、マラヤ・ポドゥッシェチカ遺跡などでも出土している。またマラヤ・ポドゥッシェチカ遺跡では、M1 aタイプの鉄鏃も出土している。ちなみに、Ж. В. Андреева 他 (1986) は、ペスチャヌイ1遺跡の石鏃を以下のように説明している。すなわち、多面体の長葉状の形態のものが多く、364例を占めている。横断面が楕円形のも

のは21例である。先端部が三角形で狭くて長い有茎のものは4例、先端部が三角形で幅広の短い有茎のもの1例、先端部が葉状で狭くて長い有茎のもの3例、先端部が葉状で幅広の短い有茎のもの2例であるという（Андреева et al 1986 : 70）。3～5のようなタイプが一般的であるといえよう。

図14-18は、沿海地方のルダノフスコエ遺跡出土の鉄鏃で、ポリツェ文化に属するとされている。M1 aタイプであるが、他に二等辺三角形の鉄鏃も見られる。前者のタイプは、前にも記したように、マラヤ・ポドゥシエチカ遺跡でも出土していることが指摘されており、さらにシニィ・スカルィ遺跡でも出土しているとされる（Бродянский 1987 : 190）。

ところで、В. Э. Шавкунов は12～13世紀の沿海地方における女真の武具に関する論考をまとめている（Шавкунов 1993）。シャイギン土城、アナエフスコエ土城、スカリス土城、ノヴォガラディエフカ土城、ラゾフスコエ土城などから出土している鉄鏃を分析し、細分した亜タイプ67を含む26のタイプに分類している。図は省略する。

## 2-7 沿アムールの資料（図14）

沿アムールにおける場合は、「女真文化」とされる1,000年紀末から2,000年紀初頭の骨鏃が報告されている（Медведев 1986）。図14-23～26は、コルサコフ墓址から出土した骨鏃である。報告者は「女真文化」としているが、最近のウラジオストクにあるロシア科学アカデミー極東研究所の研究者は、コルサコフ墓址は「パクロフカ文化」のタイプサイトであるとしている<sup>1)</sup>。このパクロフカ文化に関してはまだその内容が明瞭でないので、ここでは「女真文化」として扱っておく（シャフターノフ・ワシーリエフ著、天野訳 1993）。

ところで、図14-23～26の資料は、竜骨形タイプ（26）と菱形の断面のピラミッド形タイプ（24・25）とされている。23は、アゲ付きのB1 bタイプかあるいは竜骨タイプがアゲ状に見えるのであろうか。そしてこれらはユーラシア文化時代に広く広まっているとされる。さらに、ピラミッド形タイプの骨鏃は、アムール中流域ではトロイツコエ墓址で出土しており、竜骨タイプは沿海地方のノヴォガラディエフカ遺跡で出土していると指摘している（Медведев 1986 : 54-55）。これらの骨鏃の他に鉄鏃は各種のタイプが出土しているが、説明は割愛する。

次に、ここで引用されたトロイツコエ墓址の出土例を見ておこう（図14-27～56）。それは報告者のЕ. И. Деревянко（1977）によると、6～8世紀の靺鞨文化のものとされているものであるが、図示したものは骨鏃である。大半が沿海地方での分類の竜骨タイプに属するといえる。ただし、横断面は菱形と楕円形の他にやや扁平な三角形のものが含まれているようである。45のようなアゲ付きのB1 bタイプはむしろ稀有な例である。また、29・30・37・39・43・46・52のように両側縁に小さな抉りが見られる例は、図13-13の渤海時代のランセット形の骨鏃に名残りをとどめているのであろうか。このトロイツコエ墓址では、これらの骨鏃の他にも各種の鉄鏃が伴っているが、その説明は省くことにする。ちなみに250点の鏃のうち、190点が鉄製、51点が骨製、残りが石製とされている。

アイヌ自製品の研究—矢尻—

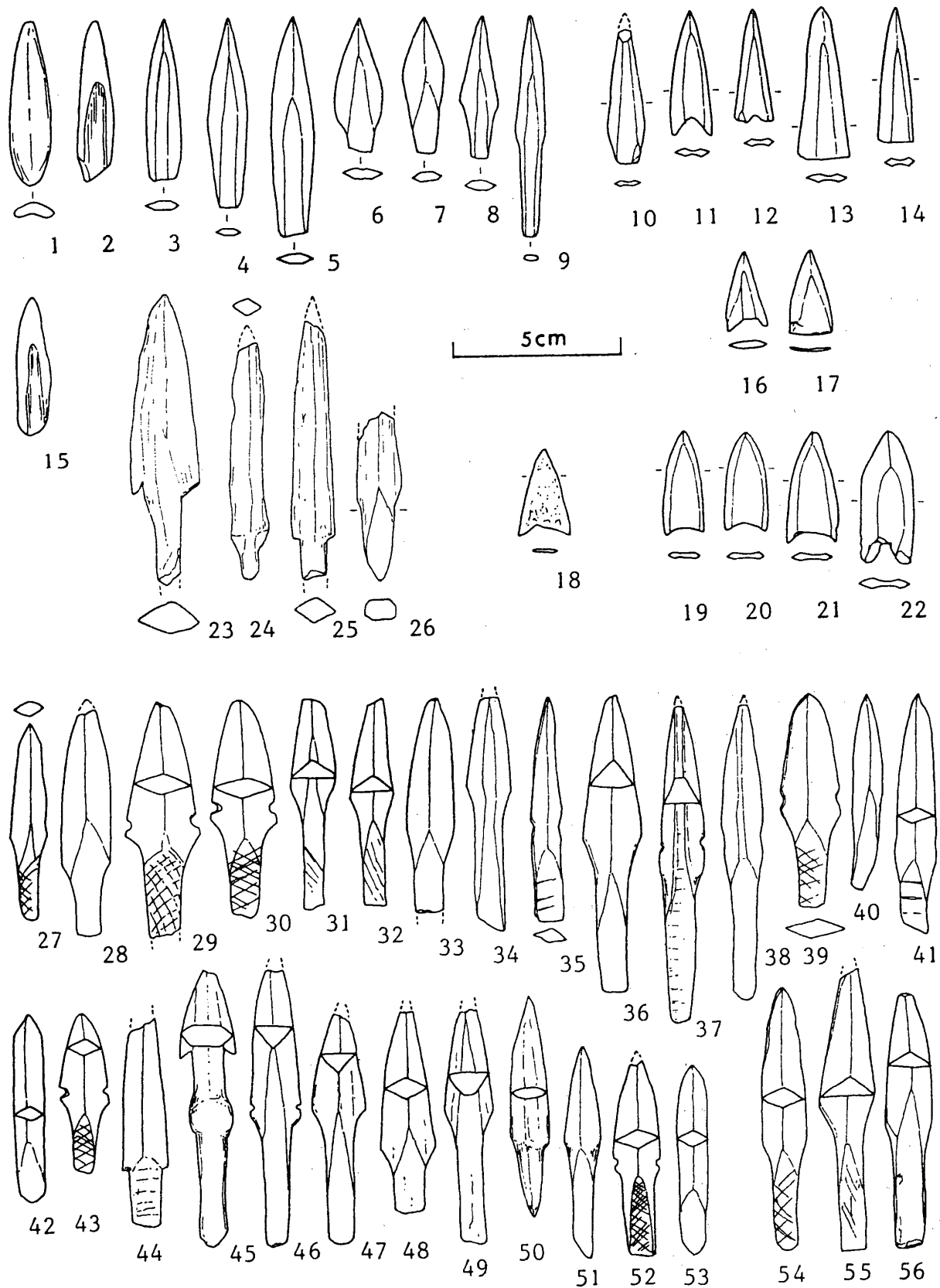


図14 沿海地方・沿アムール付近の骨鏃他

なお、図14-10～14・16・17の資料は参考までに載せたものであるが、アムール中流域の著名なポリツェ I 遺跡のスレート製石鏃である（Окладников et al 1970）。両面有溝の S 1 a タイプや S 2 a タイプが見られる。10は2号住居址、11～14は3号住居址、16・17は4号住居址からの出土である。他にも5・8・9・10号住居址でも類例が見られる。また、ポリツェ II 遺跡においても両面有溝 S 2 a タイプや溝無しの S 2 a タイプの石鏃が出土している（Деревянко 1976）。

ところで、このポリツェ I 遺跡3号住居址では骨鏃も出土しているらしい（Окладников et al 1970）。図は示されていないが、磨製で針状のタイプであるといわれるので、オホーツク文化に伴う図9-51のようなタイプであろうか。

また参考資料としてあげた19～22は、北朝鮮公貴里遺跡出土の磨製石鏃であるが、両面有溝の S 1 a タイプとしてよいであろう。溝が無いものも見られる。前7～3世紀の巨石文化に属するとされている（『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』1959）。

以上が代表的なものの紹介である。これらの資料と、前に触れた沿海地方の7～11世紀のノヴォガラドィエフカ遺跡、クルグロイ・ソプカ土城、マリヤノフスコエ土城、シニイ・スカルィ遺跡、11世紀のナデジンスコエ墓址、ドゥボヴォエ墓址、ボロニ墓址など、12～13世紀のトゥングースカ川河口遺跡、ジャリンスコエ土城、スカリスト土城、アナニエフスコエ土城、シャイギン土城のものを加えて、V. E. Медведев (1987) は鉄鏃に関する考察を行っているが、これも鉄鏃のみであるので詳細は省略する。

また、北アジアの初期鉄器時代から中世にかけての武具をまとめたものとして、V. E. Медведев, Ю. С. Худяков 編 (1987) が出されている。その中には、A. С. Васютин 他のゴルノ・アルタイ地方の中世の古チュルク族の鉄鏃のタイプ分けが紹介されている。三稜形のものが大半であるが、6グループに大別している（Васютин et al 1987）。

同じく B. A. Кони́ков (1987) は、西シベリアのオムスク地方の2,000年紀初頭の鉄鏃と骨鏃を紹介している。骨鏃には片側にアゲを有するタイプと B 1 b のアゲ付きのタイプがあり、他に図12に示したようなヤクーチャ出土の B 2 b タイプに近いものが見られる。さらに、沿海地方のところで見た渤海時代のタイプ1の骨鏃つまりピラミッド形の三角形鏃やタイプ2の竜骨形、タイプ4のランセット形に近いものが確認できる。

さらに、Ю. С. Худяков は中世初頭の中央アジア東部地域の遊牧民の武具に関してまとめている（Худяков 1991）。例えば、6～10世紀のプリ・バイカル地方のチュルク語派に属するクリカン族<sup>2)</sup>の鉄鏃は4グループ、18タイプに分けられて説明されている。骨鏃は2グループ、4タイプに分類されている。その他、ザ・バイカル地方のバイルク族、同じくシヴェイ族の鉄鏃と骨鏃の分類、さらに11～14世紀の契丹、モンゴル族などのそれらの分類を行っている。ここではその一例として、モンゴル族における場合の骨鏃のタイプ分けを模式的に表した型式学的編年図を若干改変して紹介しておく（図15）。

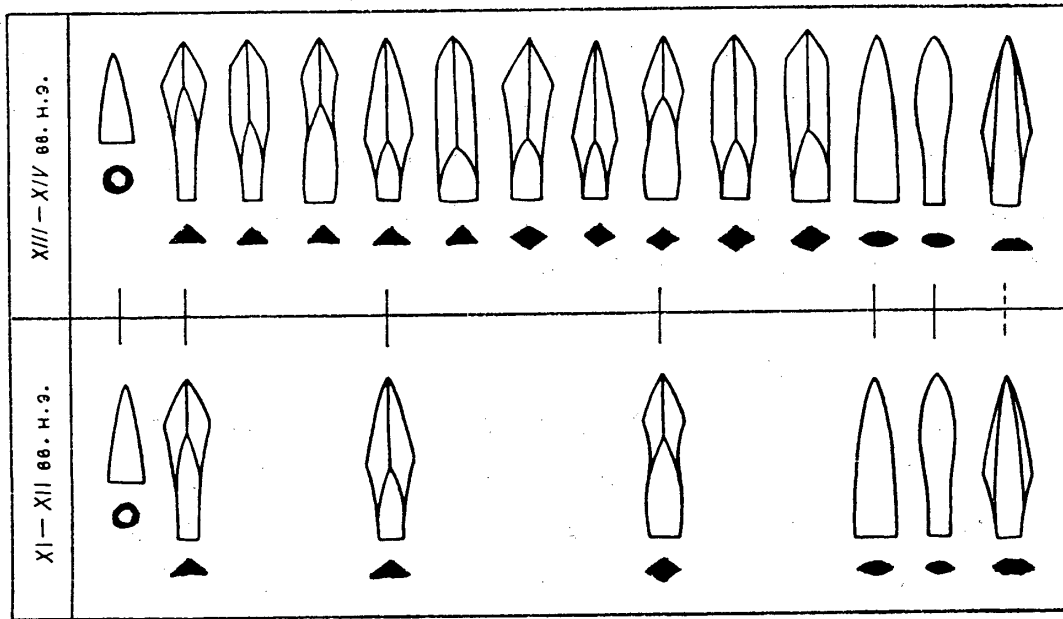


図15 モンゴル族の骨鏃の型式学的編年

### 3 民族資料としての矢尻

では、以下に北方諸族のいわゆる民族資料としての矢尻を概観しておくことにしたい。

#### 3-1 北海道アイヌの資料 (図16)

図16の資料は、明治時代の初め頃に道南部の八雲町で使用されていたとされるもので、松前町松前城資料館収蔵資料である。根曲り竹を使用した竹鏃であるが「外観は、両側縁がややふくらみ基

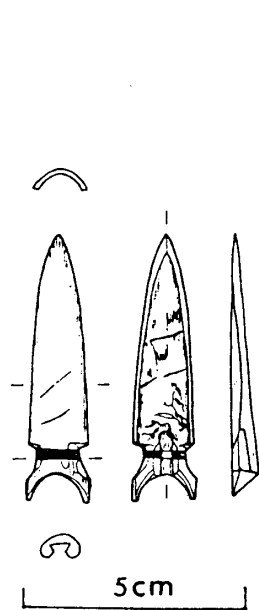


図16 北海道アイヌの竹鏃

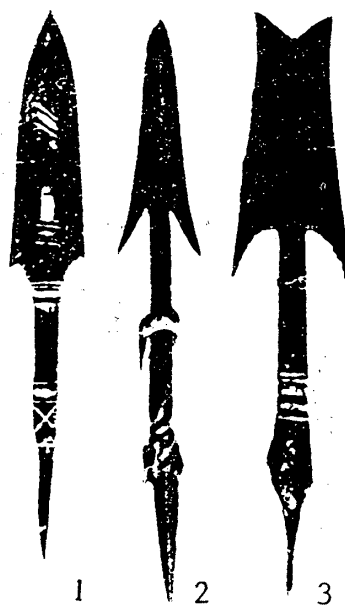


図17 樺太アイヌの鏃

部両側縁を抉入する。この部位で糸を縛る。基部は逆鉤状となる。抉入部より上方の両側縁は極めて尖鋭である。裏側中央はやや窪み、基部に逆台形の断面形を呈する茎溝を有す。重さは1gである」(松崎他 1983:40)と説明されている。裏側の窪みとされるものはいわゆるルムチナであり、毒窩付き片面有溝W1 aタイプで、先にアイヌの矢尻の一般的理解のところで紹介した図2と基本的に同じである。竹という素材であることから、矢尻先端部の横断面の形態に違いがあり、さらにルムチナ(毒窩)の形状に違いがある程度である。

### 3-2 樺太アイヌの資料(図17)

図17の資料は、Ч. М. Таксами (1969) が紹介しているもので、南サハリンアイヌの19世紀~20世紀初頭の鏃である。旧ソ連科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学・民族学博物館(MAЭ)所蔵資料となっている。材質の説明は見られないが、1はBもしくはW1 bタイプ、2・3はM1 bタイプと思われる。前に図4で樺太アイヌの鏃を紹介したが、その12・13に近いタイプと考えられる。1には、千島アイヌの骨鏃に見られたような所有印が刻印されており注目に値する。

### 3-3 ニヴヒの資料(図18)

図18-1~7の資料は、Ч. М. Таксами (1975) が紹介している19世紀中葉~20世紀初頭とされる骨鏃である。これも旧ソ連科学アカデミー MAЭ 所蔵資料である。1は片面有溝に見える二等辺三角形のもの、2はやはり片面有溝とすることができるB1 aタイプ、3・4は毒窩付きのB2 bタイプ、5~7はB2 bタイプと考えることができよう。3と4の溝を毒窩としたのは、有茎であることからであるが、注目したい資料である。前に図4で紹介した14のニヴヒとウィルタの儀式矢もB2 bタイプであり、むしろその形態が主流なのであろうかと考えられる。

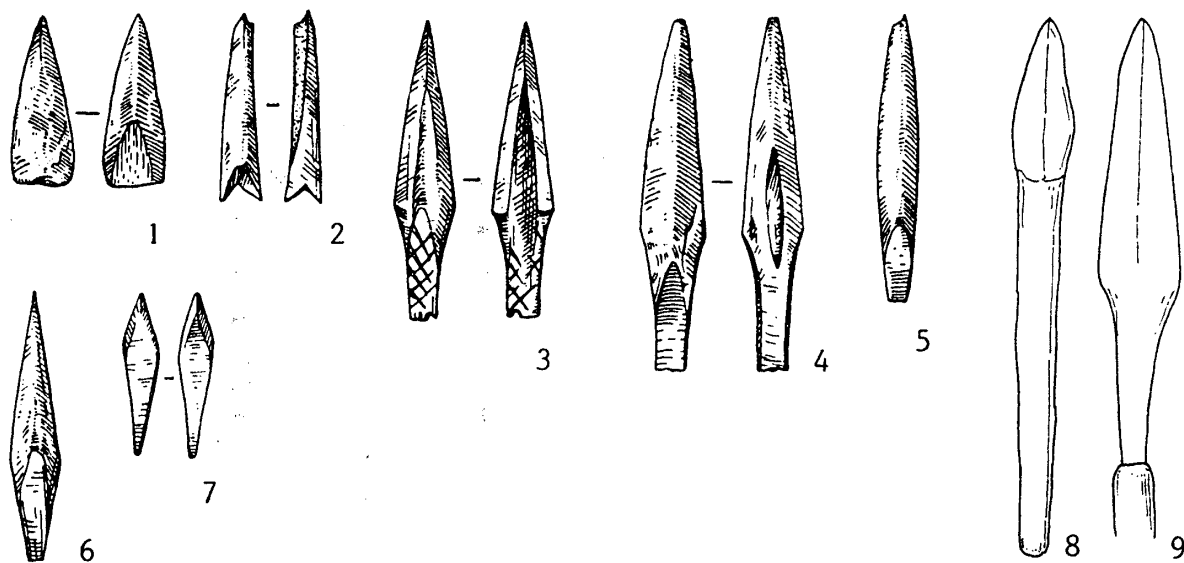


図18 ニヴヒの骨鏃他



図18-8・9は、A. V. Смоляк (1984) 紹介の鏃であるが、8は骨鏃でB2 bタイプ、9は鉄鏃でM2 bタイプである。やはりB2 bタイプが一般的であったことがわかる。

### 3-4 ウリチの資料 (図19)

図19-1~5は、Смоляк (1984) が紹介したウリチの鉄鏃である。1・2・4・5はM2 bタイプであるが、1は有溝である。3はM1 bタイプである。旧ソ連科学アカデミー MAЭ 所蔵資料を含んでいるらしい。

### 3-5 ナナイの資料 (図19)

図19-6~12の資料も、旧ソ連科学アカデミー MAЭ 所蔵資料を含む A. V. Смоляк (1984) 紹介の鉄鏃である。M1 bとM2 bタイプを含むが、8には毒窩とも見える溝が残っているが不明である。13~15は、凌純聲 (1920) が示している赫哲族 (ナナイ) の骨鏃である。13・14はB1 bタイプ、15はB2 bタイプとすることができよう。図示しなかったが、M2 bタイプの鉄鏃も見られる。また、先端が二又になった鉄鏃もある。

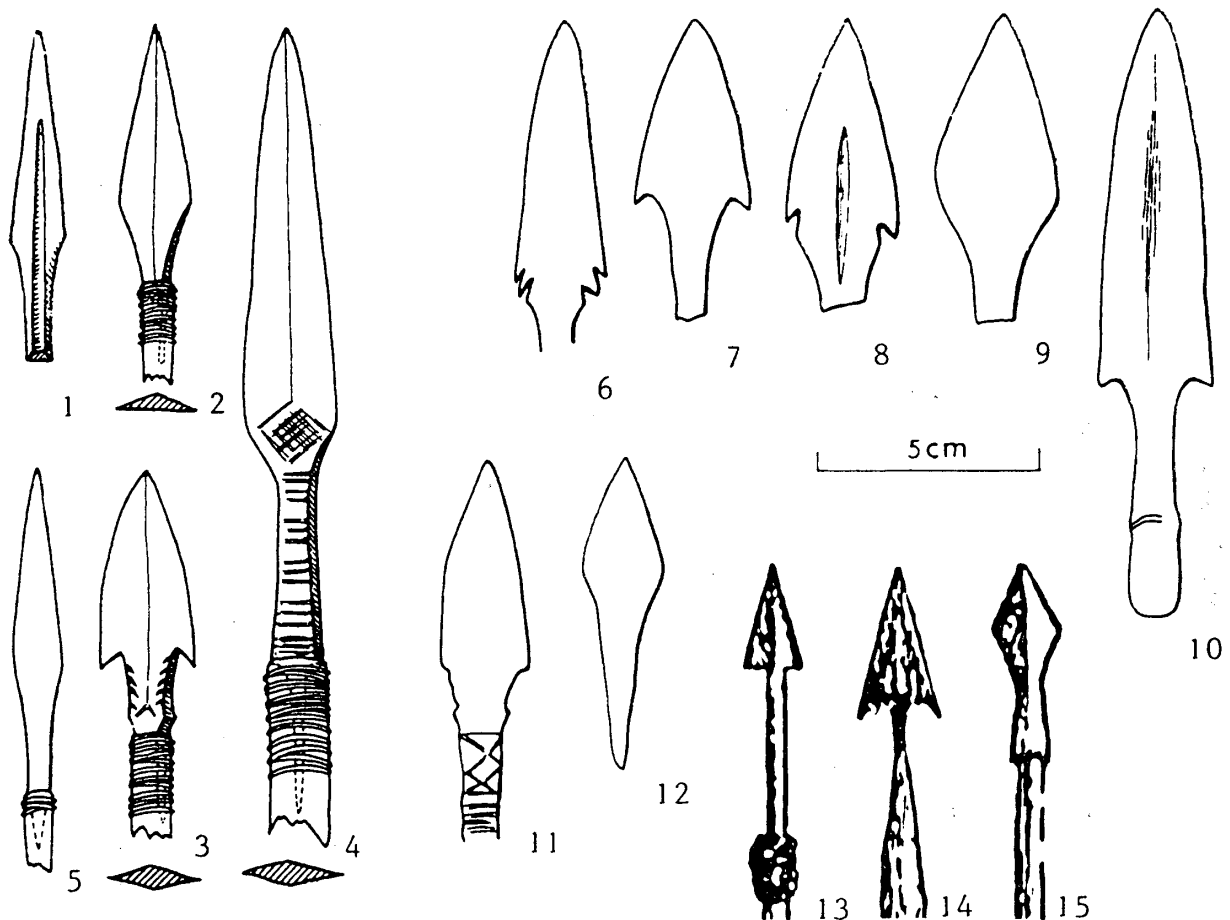


図19 ウリチ (1~5) とナナイ (6~15) の鉄鏃他 (13~15は縮尺不明)

3-6 コリャークの資料

図を呈示することができないが、コリャークの矢尻については鳥居龍藏(1926)が説明しているので、それを引用しておこう。

「彼らはなお矢柄に骨鏃をも附けているが、その材料は鯨・馴鹿・海象及びマンモス等の骨・牙等から作られている。こういう骨鏃は彼らの各部落に於いて見る事が出来るが、骨鏃の使用は、これを狩りに使用することはあまり見ない。その内で海象の骨鏃は主として鳥を狩りする時に使用する。又、木の鏃は矢柄の先を尖らして作っているものである。……鉄鏃は……これも等しく矢柄の先に挿し込んで、それを動物の筋で巻いているものもあれば、又、矢柄の先に骨片が附いていて、その骨片の先端の開いた所に挿し込んでいる。ヨヘルソン氏は、コリャークで矢を多く採集したが、これを分類すると凡そ三十種ばかりの形式があるといっている。そして矢の形状はチュクチと同じである」(再録 p. 232)。

3-7 チュクチの資料 (図20)

図20-1の資料は、A. ビーハン(本田・伊藤訳 1944)が紹介している鉄鏃である。「大獣用の鉄鏃をつけた木製の矢」とされており、「チュクチ人はイヌイト人と同様に、水禽の捕獲に、革紐に結びつけられた投げ弾……投石機、弓と骨製の矢鏃をつけた矢、ならびに先端に平滑な矢鏃をつけ矢骨に逆鉤附の骨製の側尖を三つつけた長籐の矢を用いる」(p. 32)とされる。

図20-2~12は、W. Bogoras(1904)が紹介している鉄鏃などである。材質については詳細は不明であるが、「最近の弓矢は、鉄・骨・牙・木あるいはこれらの材料の組み合わせで作られている」(pp. 155-156)と説明がある。2・3は1 a タイプ、4は1 b タイプ、5~12は2 b タイプに

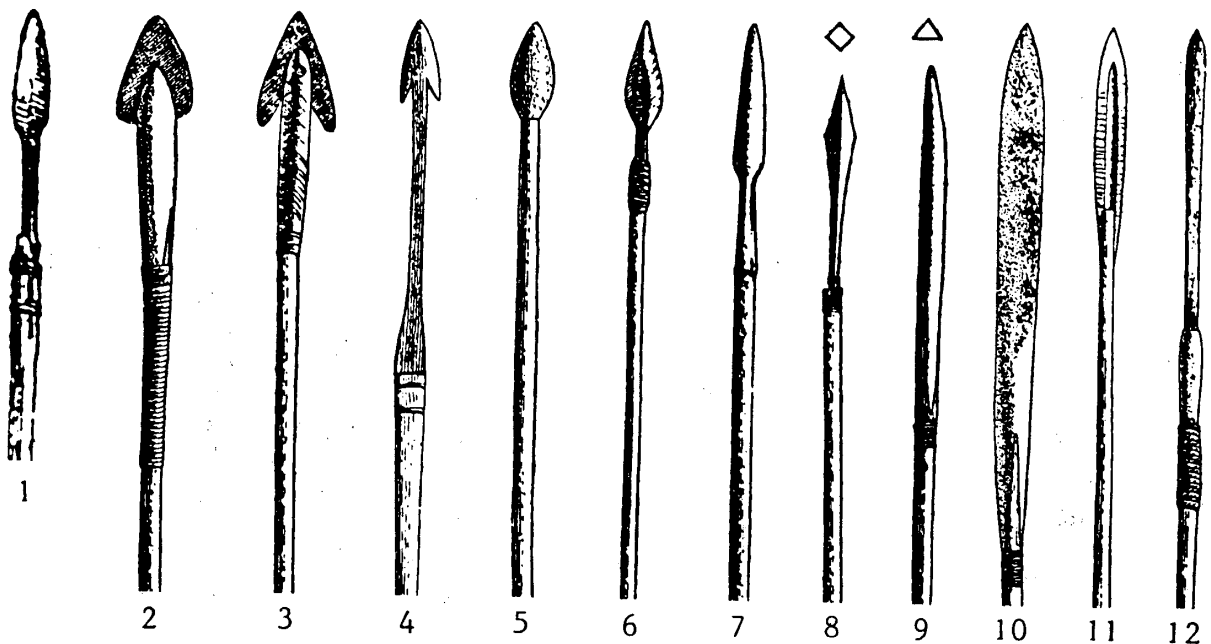


図20 チュクチの鉄鏃他

属するであろう。11には溝が見られるが、毒窩であるかどうかは不明である。

### 3-8 ブリャートの資料

ブリャートの矢尻については、M. Г. Левин, Л. П. Потапов (1956: 227) が紹介している。しかし材質などの詳細な説明はなく、不鮮明な写真から判断すると、2 bタイプに属すると考えられる亜種が3点報告されている。図は省略する。

### 3-9 サハ(ヤクート)の資料(図21)

図21に示したものは、Ф. М. Зыков (1989) が紹介している骨鏃(1~5)と鉄鏃(6)である。骨鏃については、前にヤクーチャの発掘資料のところで紹介した И. В. Константинов (1971) の3分類に従っている。すなわち、第一のタイプ(図21-1)、第二のタイプ(同2・3)、第三のタイプ(同4・5)である。また、鉄鏃に関しても説明されているが、これも Константинов の4分類に従っている。つまり第一のタイプは長い鋤状のものであり、長さは8~9.7cmを測る。第二のタイプ(図21-6)は槍状の矢尻で、太くて大きなものである。長さは15.5cmまでに達する。第三のタイプは鋤状の幅広の刃をもつもので、長さは4.1cmほどである。第四のタイプは尖っていない断面が四角形のものである。

さらに、Зыков は Ю. С. Худяков (1980) の細かな分類の大略を述べている。これとは別に、18世紀のヤクートの武具として、M. Г. Левин, Л. П. Потапов (1956) 紹介の鉄鏃があるが、それによると、二又あるいは三又のものも含まれているようである。

### 3-10 西シベリアの資料

西シベリアのセリクーブ(旧称オスチャーク・サモイェード)の資料が紹介されている。図は省

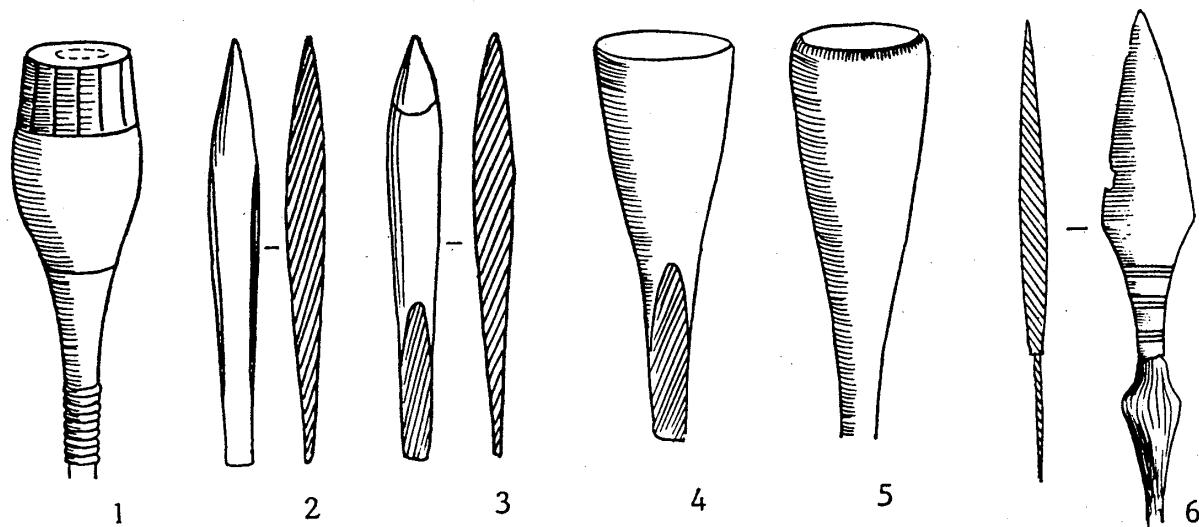


図21 ヤクートの骨鏃他

略するが、И. Н. Гемуев 他 (1984) によるものである。木製のいわゆる鏃矢状のもの他に、前述の沿海地方のノヴォガラドィェフカ遺跡出土の図13-16 (骨鏃タイプ2) に類するここでいう B 2 b タイプに属する骨鏃が見られる (p. 40, 図1-7)。また、アゲをもつ B 1 b タイプの「おそらく考古学的にはプロトタイプ」とされるものも図示されている (同, 同 9~11)。他の鉄鏃としては、先端が二又あるいは三又に分かれるタイプのものや、アゲ付きの M 1 b タイプ, M 2 b タイプ, 前に鏃形 (タイプ 8) としたタイプなどが見られる。

ネnetz (ネンツィ) に関するものは、И. Н. Гемуев 他 (1984) と Л. В. Хомич (1966) が紹介している。二又の鉄鏃が多いようであるが、M 2 b タイプのものもある。鏃矢も見られる。

#### 4 アイヌの矢尻の系譜

以上、アイヌの自製品のひとつとしての矢尻をめぐって、近隣地域の発掘資料およびいわゆる民族資料と呼ばれる骨鏃や鉄鏃などを概観してみた。ここで、最初にあえて注目しておいた『蝦夷志』で代表させておいた如き「毒窩」を有する矢尻を中心に若干の考察を加えて結びとしたい。

この毒窩と関連するのは、言うまでもなく毒矢であり、矢毒である。この問題に関しては、三上次男の研究が代表的である (三上 1966)。また、石川元助の研究も重要で、基本的なことはすべて述べられているといえる (石川 1963)。例えば、三上は毒矢使用の記録を古文獻に求めているが、沿海地方方面を自らの根拠地とした 3 世紀頃の挹婁, 5~6 世紀頃の勿吉, 7~8 世紀の靺鞨などに毒矢使用が認められ、その西方および南方に隣り合う諸族には、その習俗がないことを指摘している。さらに、広く「古アジア族」(言語系では旧アジア諸語系) における毒矢を概観している。それは苦兀 (明代に呼ばれた樺太アイヌ), イテリメン (カムチャダール), コリャーク, チュクチ, ユカギール, エスキモー, アリュート, 北千島アイヌ, ニヴヒ (ギリャーク) そして北海道アイヌなどに認められるとし、18 世紀頃の記録を挙げて検証している。ただし、ニヴヒの場合は 19 世紀半ばの調査結果であるが、それ以前の毒矢使用の可能性を説いている。そして、「ツングース語族」(言語系では「アルタイ諸語系—ツングース諸語系」) は「全般かつ原則的には毒矢使用の習俗を持たなかったのである」(p. 265) としている。さらにまた、なぜ太平洋沿岸の古アジア族系諸族においてのみ毒矢が使用されたり保持されたのか、という問題提起を行っている。それについては、それらの地域が海獣猟が盛んなところで「この共通な地盤の上に採用された毒矢は、同時に狩猟にも使用され、ついに同一民族文化圏のうちに伝統的な地位を築くにいたらせたものではなからうか」(p. 273) と結論している。

ところで石川元助の場合は、これらの地域は「アコニット毒矢文化圏」とも呼ばれる「トリカブト毒矢文化圏」中に含まれていることを指摘している。石川は、世界の毒矢使用の慣習を次のように区分して文化圏を設定している (p. 14)。

##### I アジア毒矢文化圏

##### I—1 トリカブト毒矢文化圏      I—1—a 東北アジア海岸文化圏

I-1-b 東南アジア内陸文化圏

I-2 イポー毒矢文化圏

II アフリカ毒矢文化圏=ストロファンツス毒矢文化圏

III 南アメリカ毒矢文化圏=クラレ文化圏

この中のイポーとはクワ科植物の樹乳，ストロファンツスはキョウチクトウ科ストロファンツス属植物の樹乳，クラレはツツラフジ科やフジウツギ科植物の幹や樹皮から抽出されるものである。これらの文化圏は図22に示される通りである。これを見ても明らかなように，北海道は前の分類の「I-1-a 東北アジア海岸文化圏」の中に含まれており，サハリン，クリール，カムチャツカ，チュコト，ベーリンジア方面との関連が認められる。

ここで，図23・24を見ていただきたい。今までがながと紹介してきた発掘資料といわゆる民族資料である骨鏃などの比較的ティピカルなものの図と地域的広がりを示したものである。発掘資料で，本論で問題にしてきた「毒窩」を有する鏃の出土地には下線をつけてあるが，その広がりには北海道，クリール，カムチャツカということができる。また，いわゆる民族資料の場合は北海道アイヌ，ニヴヒに認められる。そして，他の下線を引いた諸族つまり樺太アイヌ，千島アイヌ，イテリメン，アリュート，コリヤーク，チュクチ，ユカギール，エスキモーなどは，三上次男が示した矢毒使用の例である。この発掘資料と民族資料はおおむね重なるような分布を示しており，なおかつ石川元助が示した毒矢使用の「I-1-a 東北アジア海岸文化圏」とオーバーラップするといえるであろう。

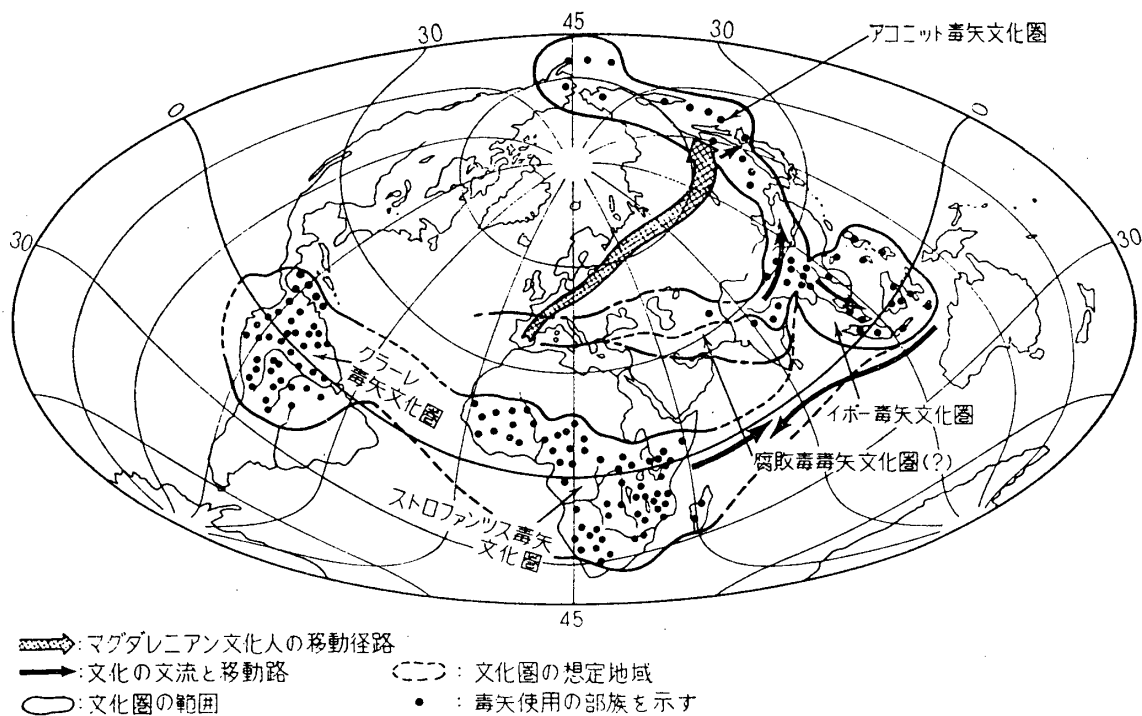


図22 毒矢文化圏の設定（石川元助による）

ところで、最近、注目すべき意見が発表されている。それは菊池徹夫(1993)によるもので、以下のような主旨と受け止めることができよう。北海道の考古学上のオホーツク文化の担い手は「古アジア諸語系」に属し、擦文文化の担い手は「ツングース諸語系？」に属するかも知れないというものである。前に見たように、三上次男の意見では、アイヌは「古アジア族」に属するといわれたが、最近の言語学の立場では「アイヌの言語のアイヌ語は、日本語や韓国語とともにアルタイ語のグループに属する、あるいはアルタイ語に近い存在であることを、今日、多くの言語学者が認めている」(針原 1993:147)とされているように、「アルタイ諸語系—ツングース諸語系」にアイヌ語は属するようである。菊池はアイヌ語の系統にまでは触れていないが、擦文文化の担い手はアイヌの直接の祖先であるという通説に「一律に見えるアイヌ民族も、地域性のようなものが、かなりあるのではないのでしょうか」(p.53)と述べている。このように、最近のアイヌ族の系統論は、これからは考古学の立場あるいは民族学の方からも積極的に切り込んでいかなければならない課題となってきていると感じるところである。

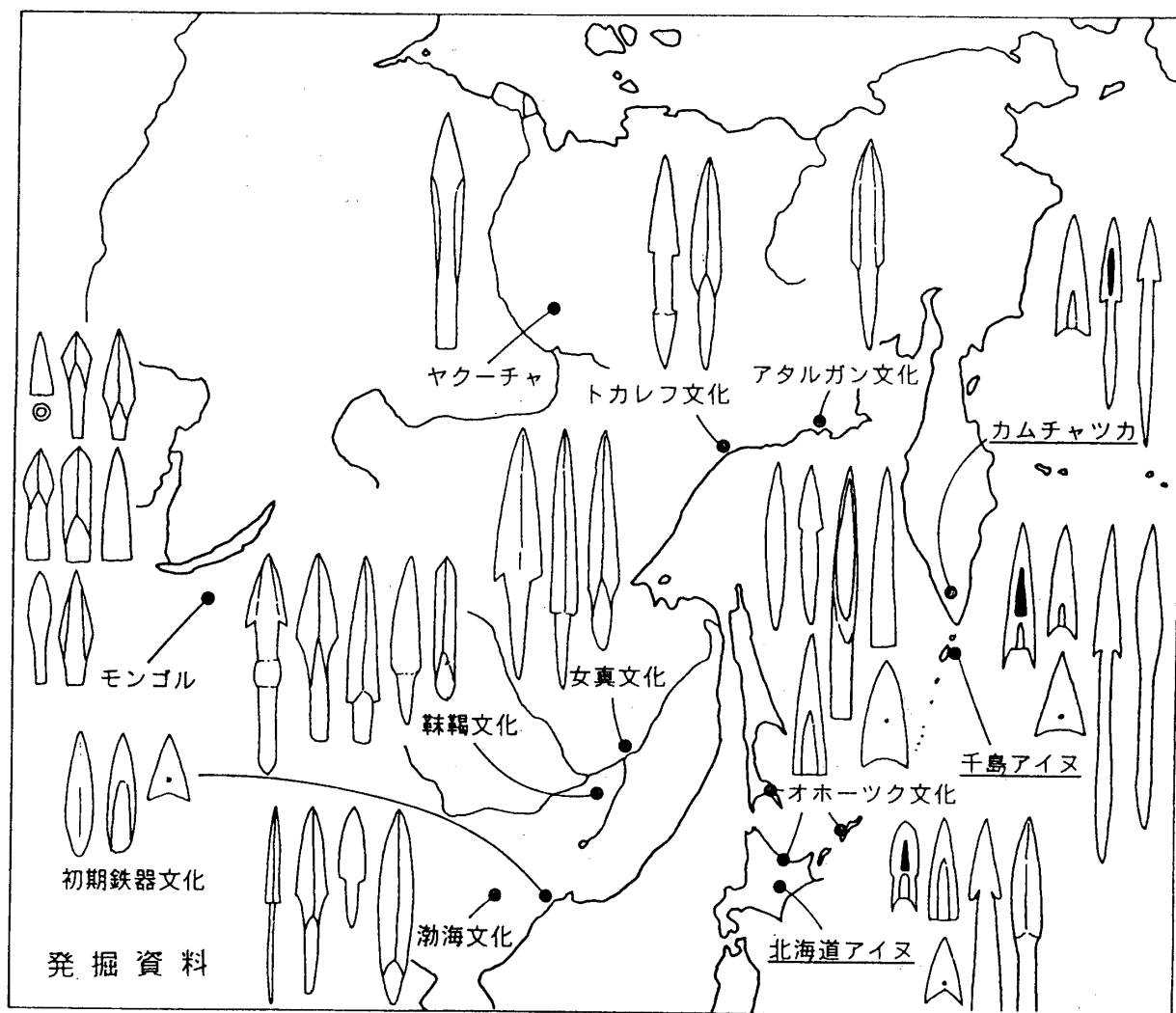


図23 骨鏃他の発掘資料の地理的分布

さて、このような矢毒にもっとも関連が深い「毒窩」を有する矢尻や鏃の広がりであるが、発掘資料の場合は北海道からクリールを経てカムチャツカまでに認められる。ただしカムチャツカの例はアイヌ文化の影響と考えられている。また民族資料では、管見の限りでは、北海道アイヌ、千島アイヌ、ニヴヒに認められるようである。この両者の広がりとは、前出の矢毒文化の広がりから見ると、やや狭い局限された地域にあるといえる。言い換えれば、オホーツク海の南半部を取り巻く地域に限定されているようである。

前に「アイヌ自製品」として見ておいた軽石製火皿の場合は、エスキモーの石ランプとの関連が見いだされ、その石ランプを含めた広がりにはオホーツク海・ベーリング海沿岸地域にあった。すなわち、石川元助のいう毒矢使用の「I-1-a 東北アジア海岸文化圏」とほぼ一致しているのである。また同じく「アイヌ自製品」の煙管のうち石製煙管などの広がりには北海道・クリール・サハリンなどのオホーツク海南半部の沿岸地域に集中して見られる。これらの広がりとは、「毒窩」を有する矢尻や鏃の広がりとは完全に合致するものではないが、大局的には同じ広がりといっても過言ではなからうと考える。とくに、石製煙管の考古資料とはほぼ一致しているのは、単なる偶然ではある

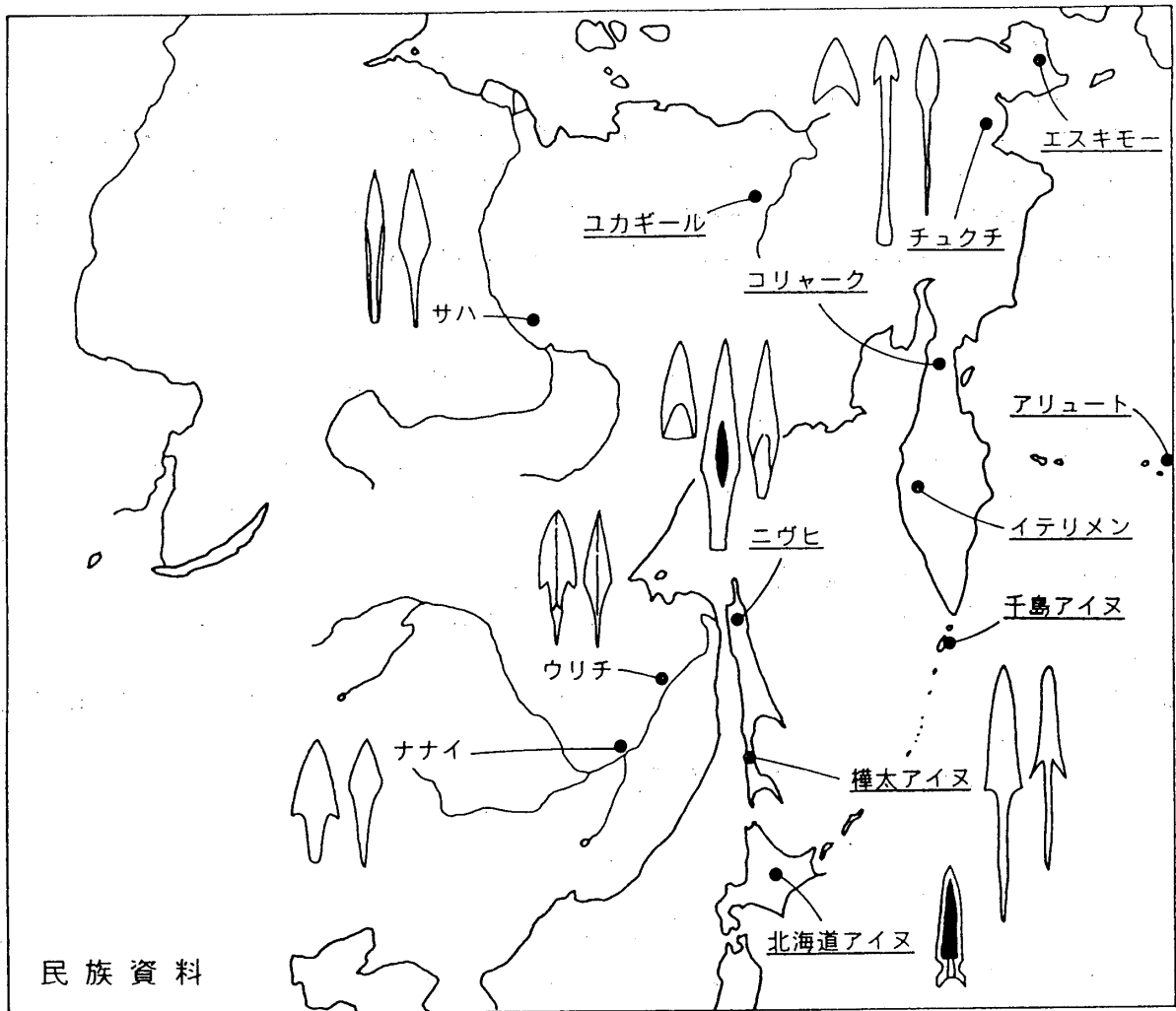


図24 骨製矢尻他の民族資料の地理的分布

まい。おそらくその辺りに「アイヌ文化」の本質そして言語系所属の問題に迫り得る「何か」が求められるのであろう。北方アジア集団（民族的小集団）の形成に関わる各文化要素の把握を、考古学・民族学的に今後も進めていかなければならないと考える所存である。

最後に、アイヌの場合の特殊な「毒窩」付き毒矢は、石川元助によって「近距離離頭式毒矢」と名づけられている（石川 1963：48）。それは渡辺仁による名称「木製単純矢」とも関連するものである（渡辺 1981：105）。そして渡辺は S. L. Rogers (1940) を引用して述べている。「アジアの単純弓はアイヌ、樺太ギリヤーク、オロチ、チュクチ及ヤクートに局限される……本来の分布は間宮海峡を狭んで両側の狭い地域に局限されることが解る」と。さらに「単純弓が北アジア太平洋の一角に局限された分布を示すのは、そのタイプが湿潤環境で実用価値を発揮し、他の複雑な型式（新型式）よりも機能的に優れていたから、変化（新型導入）の必要がないどころか変化は拒否されたと考えられる」とも述べている（p.106）。この論点を考えるために、今回の矢尻・鏃の研究がいささかでも役立てば幸いである。

#### 註

- 1) Н. Н. Крадин, Ю. Г. Никитин, В. И. Болдин 氏のご教示による。
- 2) 加藤九祚 (1986) によると、クリカン族は「6—8世紀にアンガラ川およびレナ川上流部、バイカル湖東部に住んだ部族。いくつかの特徴によってみるに、当時のエニセイ・キルギス、アルタイ・チュルクと共通点が少なくない。A. オクラドニコフは、ヤクートの先祖は kurykan であって、kangalas 部族の名称の1つであるという。……T. ベルタガエフはクリカンを民族名 Buryaty と結びつけている。『新唐書』回鶻伝に出てくる『骨利幹』がこれにあたる」(p.406) と説明されている。

#### 文 献

- 馬場 脩 (1935) 「北千島占守島の第二回考古学的調査報告」『人類学雑誌』51-3：92-115
- 馬場 脩 (1936) 「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学研究』3-2：89-131
- ビーハン, A. (本田弥太郎・伊藤浩夫訳 1944) 『外郭アジアの民族と文化』彰考書院
- 出利葉浩司 (1990) 「開拓記念館が収蔵するアイヌの弓矢について(1)」『北海道開拓記念館調査報告』29：17-30
- 後藤守一 (1939) 「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54-4：133-161
- 針原伸二 (1993) 「縄文人—北方起源の可能性」『原日本人』朝日ワンテーママガジン14, 朝日新聞社：144-152
- 北海道埋蔵文化財センター編 (1986) 『ユオイチャン跡・ポロモイチャン跡・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書26
- 犬飼哲夫・名取武光 (1934) 「アイヌ土俗品解説1」『ドルメン』3-2：31-39
- 石川元助 (1963) 『毒矢の文化』紀伊國屋書店
- 加藤九祚 (1986) 『北東アジア民族学史の研究』恒文社
- 菊池徹夫 (1993) 「土器文化からアイヌ文化へ」『海峡をつなぐ日本史』三省堂：41-62
- 菊池俊彦 (1993) 「環オホーツク海の古代文化」『海・瀉・日本人』講談社：124-159
- 金田一京助・杉山壽榮男 (1942) 『アイヌ芸術—木工篇—』第一青年社
- 児玉作左衛門 (1971) 『明治前日本人類学・先史学史』日本学術振興会
- 前田 潮 (1985) 「カムチャッカ半島におけるアイヌ文化の遺跡」『北方科学調査報告』6：67-82



- 前田 潮・山浦 清編 (1992) 『北海道礼文町浜中 2 遺跡の発掘調査』 礼文町教育委員会
- 松田 功 (1993) 『オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』 斜里町文化財調査報告 VI
- 松田 功・萩野幸男 (1993) 『オシヨコマナイ河口東遺跡・オタモイ 1 遺跡発掘調査報告書』 斜里町文化財調査報告 V
- 松崎水穂他 (1983) 『史跡上之国勝山館跡Ⅳ』 上ノ国町教育委員会
- 三上次男 (1966) 「挾婁人の毒矢使用とその系譜」 『古代東北アジア史研究』 吉川弘文館：245-281
- 難波琢雄 (1982) 「イヨルム (毒矢)」 『北海道新聞』 1982年 6 月10日記事
- 名取武光 (1985) 『アイヌの花矢と有翼酒箸』 六興出版
- 西 幸隆・松田 猛他 (1989) 『釧路市材木町 5 遺跡調査報告書』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 大場利夫 (1955) 「モヨロ貝塚出土の骨角器」 『北方文化研究報告』 10：173-249
- 大場利夫・大井晴男編 (1976) 『香深井遺跡 (上)』 東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 (1981) 『香深井遺跡 (下)』 東京大学出版会
- 大谷敏三・田村俊之編 (1982) 『末広遺跡における考古学的調査 (下)』 千歳市文化財調査報告書Ⅷ
- 佐藤一夫編 (1987) 『弁天貝塚Ⅰ』 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 佐藤一夫編 (1989) 『弁天貝塚Ⅲ』 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 佐藤一夫 (1975) 「苫小牧市史先史時代編」 『苫小牧市史 (上)』 苫小牧市
- 沢 四郎編 (1963) 『北海道阿寒町の文化財』 1, 阿寒町教育委員会
- シャフターノフ, E. V., ワシーリエフ, Yu. M. (天野哲也訳 1993) 「アムール流域のパクローフカ文化：年代推定と民族解釈の問題」 『北海道考古学』 29：29-36
- 富水慶一 (1979) 「美唄市 3 号溜池出土の遺物」 『北海道考古学』 15：111-130
- 鳥居龍藏 (1903) 『千島アイヌ』 吉川弘文館
- 鳥居龍藏 (1919) 『考古学民族学研究・千島アイヌ』 東京帝国大学理科大学紀要42-1 (『鳥居龍藏全集』 5, 朝日新聞社, 1976再録)
- 鳥居龍藏 (1926) 『極東民族』 東洋人種学叢書第 1 編, 文化生活研究会 (『鳥居龍藏全集』 7, 朝日新聞社, 1976再録)
- 宇田川洋 (1979) 「アイヌの軽石製火皿の文化史的位置づけ」 『物質文化』 33：37-57
- 宇田川洋 (1987) 「北方地域における開窩式銚頭について(1)」 『北海道考古学』 23：45-58
- 宇田川洋 (1989 a) 「アイヌ文化の考古学」 『よみがえる中世』 4, 平凡社：166-180
- 宇田川洋 (1989 b) 「北方地域の古代弦楽器試論」 『考古学と民族誌』 六興出版：197-214
- 宇田川洋 (1991) 「北方地域の煙管と喫煙儀礼」 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 10 (上)：51-101
- 渡辺 仁 (1981) 「北方文化研究の課題」 『北海道大学文学部紀要』 29-2：79-141
- 山浦 清 (1993) 「『環オホーツク海文化』 という視点」 『北海道考古学』 29：9-20
- 米村喜男衛 (1950) 『モヨロ貝塚資料集』 網走郷土博物館
- 米村 衛編 (1988) 『ナヨロの沢遺跡・浜藻琴神社遺跡』 網走市教育委員会
- 凌 純聲 (1920) 『松花江下游の赫哲族』 上海文芸出版社 (影印本 1990)
- 『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』 (1959) 遺跡発掘報告第 6 集
- Bergman, C. A., McEwen, E. & Miller, R. (1988) Experimental archery: projectile velocities and comparison of bow performances. *Antiquity* 62-237.
- Bogoras, W. (1904) The Chukchee -Part I-. *Memoirs of the American Museum of Natural History*. Vol. XI.
- Hitchcock, R. (1892) The Ainos of Yezo, Japan. *The Report of the National Museum for 1890*. Smithsonian Institution. United States National Museum: 429-502 (北構保男訳『アイヌ人とその文化』 六興出版, 1985に収録：41-238)

- Leroi-Gourhan, A. (1979) Un voyage chez les Aïnou: Hokkaido-1938. Paris.
- Ölschleger, H.-D. (1989) Umwelt und Wirtschaft der Aïnu-Bemerkungen zur Ökologie einer Wildbeutergesellschaft. Berlin.
- Rogers, S.L. (1940) The Aboriginal Bow and Arrow of North America and Eastern Asia. *American Anthropologist* 42 : 255-269.
- Rudenko, S.I. (1964) The Culture of the Prehistoric Population of Kamchatka. *ANAINA* 5: 265-295.
- Андреева, Ж. В. et al (1986) Янковская Культура. Москва.
- Бродянский, Д. Л. (1987) Введение в Дальневосточную Археологию. Владивосток.
- Васильевский, Р.С. (1971) Происхождение и Древняя Культура Коряков. Новосибирск.
- Васютин, А. С. et al (1987) Новые находки предметов вооружения в древнетюркских оградках горного Алтая. Военное Дело Древнего Населения Северной Азии. Новосибирск: 107-114.
- Гемуев, И. Н., А. И. Соловьев (1984) Стрелы Селькупов. Этнография Народов Сибири. Новосибирск.
- Деревянко, А. П. (1976) Приморье I тыс. до Нашей Эры. Новосибирск.
- Деревянко, Е. И. (1977) Троицкий Могильник. Новосибирск.
- Диков, Н. Н. (1979) Древние Культуры Северо-Восточной Азии. Москва.
- Дикова, Т. М. (1983) Археология Южной Камчатки в Связи с Проблемой Расселения Аïнов. Москва.
- Зыков, Ф. М. (1989) Традиционные Орудия Труда Якутов (XIX-начало XX века). Новосибирск.
- Коников, Б. А. (1987) О вооружении прииртышского населения начала II тыс. н. э.. Военное Дело Древнего Населения Северной Азии. Новосибирск: 163-171.
- Константинов, И. В. (1971) Материальная Культура Якутов XVIII века. Якутск.
- Лебединцев, А. И. (1990) Древние Приморские Культуры Северо-Западного Приохотья. Ленинград.
- Левин, М. Г., Потапов, Л. П. (1956) Народы Сибири, Народы Мира. Москва.
- Медведев, В. Е. (1986) Приамурье в конце I- начале II тысячелетия. Новосибирск.
- Медведев, В. Е. (1987) Общее и особенное в некоторых видах вооружения чжурчжэньской эпохи приамурья и приморья. Военное Дело Древнего Населения Северной Азии, Новосибирск: 205-219.
- Медведев, В. Е., Худяков, Ю. С. ред. (1987) Военное Дело Древнего Населения Северной Азии. Новосибирск.
- Окладников, А. П., Деревянко, А. П. (1970) Польце-Поселение Раннего Железного Века у с. Кукелево. Материалы Полевых Исследований Дальневосточной Археологической Экспедиции I. Новосибирск.
- Смоляк, А. В. (1984) Традиционное Хозяйство и Материальная Культура Народов Нижнего Амура и Сахалина. Москва.
- Семениченко, Л. Е. (1976) Характеристика наконечников стрел приморья в VIII-X вв. Новейшие Археологические Исследования на Дальнем Востоке СССР. Владивосток.
- Таксами, Ч. М. (1969) Материалы МАЭ по этнографии аïнов Южного Сахалина (XIX-начало XX в.). Сборник Музея Антропологии и Этнографии XXV.
- Таксами, Ч. М. (1975) Основные Проблемы Этнографии и Истории Нивхов. Ленинград.
- Хомич, Л. В. (1966) Ненцы. Москва-Ленинград.
- Худяков, Ю. С. (1980) Вооружение Енисейских Кыргызов. Новосибирск.

Худяков, Ю. С. (1991) Вооружение Центрально-Азиатских Кочевников в Эпоху Раннего и Развитого Средневековья. Новосибирск.

Шавкунов, В. Э. (1993) Вооружение Чжурчжэней XII-XIII вв. Владивосток.

#### 図に使用した資料

図2 : 出利葉 (1990) p.18, Fig.1 を改変。

図3 : 金田一・杉山 (1942) p.68, 図46を改変。

図4 : 名取 (1985) p.124, 図50。

図6-1 : 大谷・田村編 (1982) p.19, 図16-11, 2~5 : 富水 (1979) p.124, 図10-130~133, 6~9 : 米村 (1950) P L.51-4~7, 10 : 大谷・田村編 (1982) p.14, 図11-1, 11 : 同p.17, 図14-15。

図7-12 : 北海道埋蔵文化財センター編 (1986) p.77, 図36-15, 13 : 同p.154, 図76-39, 14 : 同p.110, 図48-15, 15 : 沢編 (1963) p.30, 図18-9, 16 : 米村編 (1988) p.189, 図177-7, 17 : 西・松田他 (1989) p.327, 図379-1, 18 : 松田 (1993) p.64, 図44-1, 19 : 佐藤編 (1987) p.51, 図19-1, 20 : 佐藤編 (1989) p.46, 図26-38, 21・22・24 : 松田 (1993) p.140, 図112-1~3, 23 : 同p.64, 図44-2, 25 : 佐藤編 (1989) p.48, 図27-3, 26・27 : 北海道埋蔵文化財センター編 (1986) p.154, 図76-40・41。

図8-28・29 : 鳥居 (1919) p.547, P L. XXXI-A・B, 30 : 馬場 (1935) P L. 7, 31~36 : 馬場 (1936) p.117, 図41, 37 : 同p.117, 図43, 38~48 : 馬場 (1935) P L.7。

図9-49 : 大場・大井編 (1976) p.370, 図147-10, 50 : 同p.370, 図147-14, 51 : 同p.370, 図147-16, 52 : 大場・大井編 (1981) p.140, 図387-2, 53 : 大場・大井編 (1976) p.733, 図310-1, 54 : 大場・大井編 (1981) p.140, 図387-4, 55 : 前田・山浦編 (1992) p.75, 図51-1。

図10- : Дикова (1983) p.84, 図19-4, 2~10 : 同p.82, 図17-1~8・10, 11 : 同p.89, 図26-3, 12~17 : 同p.90, 図27-8~13, 18 : Лебединцев (1990) p.175, 図153-2, 19・20 : 同p.113, 図102-9・10。

図11 : Rudenko (1964) p.274, 図3。

図12-1~3 : Константинов (1971) p.195, 図9-3~5, 4 : 同p.197, 図11-1。

図13-1~11 : Семениченко (1976) p.99, 図1, 12~13 : 同p.102, 図2, 26~42 : 同p.105, 図3, 43~50 : 同p.111, 図4。

図14-1・2 : Андреева et al (1986) p.74, 図32-5・6, 3~9 : 同p.70, 図28-5~7・14~17, 10 : Окладников et al (1970) p.259, 図7-7, 11~14 : 同p.138, 図54, 15 : Андреева et al (1986) p.84, 図40-3, 16・17 : Окладников et al (1970) p.283, 図13・14, 18 : Бродянский (1987) p.190, 図96-11, 19~22 : 『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』 (1959) 図19-1~3・14, 23~26 : Медведев (1986) p.54, 図30-33~36, 27 : Деревянко (1977) p.168, 図4-2, 28 : 同p.169, 図5-9, 29 : 同p.170, 図6-7, 30・31 : 同p.177, 図13-9・6, 32 : 同p.179, 図15-10, 33~35 : 同p.180, 図16-5・6・8, 36~41 : 同p.181, 図17-5~9・11, 42~50 : 同p.182, 図18-3・6・7・18~23, 51 : 同p.187, 図23-5, 52 : 同p.205, 図41-11, 53 : 同p.213, 図49-5, 54~56 : 同p.183, 図19-14~16。

図15 : Худяков (1991) p.125, 図67を改変。

図16 : 松崎他 (1983) p.44, 図31-36。

図17 : Таксами (1969) p.349, 図8。

図18-1~7 : Таксами (1975) p.39, 8・9 : Смоляк (1984) p.90, 図4-14・16。

図19-1~5 : Смоляк (1984) p.90, 図4-2~4・6・8, 6~12 : 同p.90, 図4-9~12・15・18・20, 13~15 : 凌 (1920) 図131-a~c。

図20-1 : ビーハン (本田・伊藤訳 1944) p.30, 図192-2, 2~12 : Bogoras (1904) p.156, 図74-a~e・g~k・m。

図21-1~5 : Зыков (1989) p.78, 図45, 6 : 同p.77, 図44-6。

## Arrowheads: a study of an object of Ainu manufacture

Hiroshi UTAGAWA

In their daily life and ritual the Ainu can be said to possess objects of Japanese manufacture and objects of Ainu manufacture. In this paper I consider archaeological and ethnographic examples of arrowheads, which fall into the latter category.

The six basic types of Ainu ethnographic arrowhead are classified in Fig. 5. In this figure, "W" is wood or bamboo, "M" is metal and "B" is bone. Other materials such as stone are known from archaeological examples. In Fig. 5 also, "1" means a type with two barbs, "2" is without barbs, "a" is unstemmed, and "b" is stemmed. Amongst these several types, "W1 a" is a characteristic type with a groove for the insertion of aconite poison.

I examined in some detail archaeological and ethnographic arrowheads with grooves for poison. The archaeological examples I examined came from the Ainu culture of Hokkaido and the Kurile Islands (Figs. 6-8), the Okhotsk culture (Fig. 9), the Kamchatka region (Figs. 10-11), Yakutiya (Fig. 12), the Primorie (Figs. 13-14), the Priamurie (Fig. 14), and Mongolia (Fig. 15). Ethnographic examples came from the Hokkaido Ainu (Fig. 16), the Sakhalin Ainu (Fig. 17), the Nivkhi (=Gilyak) (Fig. 18), the Ul'chi (Fig. 19), the Nanay (Fig. 19), the Koryak and Chukchi (Fig. 20), and the Buryat and Yakuts (Fig. 21). Distribution maps of these arrowheads are shown in Figs. 23 and 24, the former being the archaeological material and the latter the ethnographic. Archaeologically, the type of arrowhead with a groove for poison was known in Hokkaido, the Kurile Islands and Kamchatka, and ethnographically it was found amongst the Hokkaido Ainu and the Nivkhi.

Mikami (1966) reported that the ethnic groups possessing poison arrowheads are the Hokkaido, Kurile and Sakhalin Ainu, the Nivkhi, the Itel'men, the Koryak, the Yukagir, the Chukchi, Eskimo and the Aleuts. Linguistically, almost all of these belong to the "Paleo-Asiatic" group and their distribution overlaps the maritime Northeast Asian sphere of the Aconite (*Genus Aconitum*) poison arrowhead cultural sphere described by Ishikawa (1963). Although we must pay attention to this distribution, there remains the question of why the characteristic arrowhead with a poison groove occurred in such a limited region.

**References**

Ishikawa, M (1963) *The Culture of the Poison Arrowhead*. Kinokuniya, Tokyo. (in Japanese)

Mikami, T. (1966) The use of poison arrowheads and their *Yuro-jin* pedigree. In *Kodai Tohoku Aja Kenkyu*. Yoshikawa Kobunkan, Tokyo. (in Japanese)